

コプト語サイド方言の言語資料と文法注釈ーナポリ・国立ヴィットーリオ・エマヌエーレ3世図書館蔵・ベーサによるテキストの断片ー*

宮川 創

ゲッティンゲン大学ドイツ学術振興会共同研究センター 1136 (CRC1136) 研究員

ゲッティンゲン大学エジプト学コプト学専修博士課程, ヘブライ大学客員研究員

京都大学大学院言語学専修博士後期課程・runa.uei@gmail.com

キーワード: コプト語, エジプト語, 言語資料, 文法注釈, 文献言語学, 記述言語学

1 はじめに

ベーサ¹ は, 紀元後 5 世紀に活躍した, 現在の中部エジプト² のソハーグ近郊に位置する, 白修道院, 赤修道院, 女子修道院の修道院連合の修道院長である。彼の母語はコプト語であり, 翻訳文学の割合が多いコプト語文献の中で母語話者が著したコプト語文献として, 彼の文献はエジプト語を対象とした言語学の分野で重要である。なお, 本稿が対象とするテキストの方言はサイド方言³ である。

本稿は彼のテキストのうち, 白修道院 BA 写本 (MONB.BA) 49-56 頁に収められているテキストの断片の, 実際の写本に基づく転写, 翻字, グロス, 訳, および, 文法注釈である。この写本は, 過去に, 売人によって葉 (folio) ごとにばらばらにされて売られ, 現在はナポリ, パリ, ライデン, ロンドン, マンチェスターの 5 都市に分散しているが, 本稿が対象とするテキストが収録された部分は全てイタリアのナポリの国立ヴィットーリオ・エマヌエーレ 3 世図書館 (Biblioteca Nazionale Vittorio Emanuele III)⁴ にある。本稿の対象とするテキストの断片の所蔵番号は, IB 6 f.1r-4v である。

この写本のように, 白修道院図書館で発見された諸文献は, 19 世紀のフランス隊やイタリア隊によって大部分が自国に持ち去られ, それらの多くは, 現在, パリのフランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France), ナポリの国立ヴィットーリオ・エマヌエーレ 3 世図書館と

* 有益なコメントを下さった鈴木博之氏 (オスロ大学研究員), 戸田聡氏 (北海道大学准教授), 仲尾周一郎氏 (大阪大学助教) に心よりお礼申し上げます。

¹ コプト語 *bêsa*。アラビア語では *wīṣā*。Behlmer (2009:37) によれば, 彼の在世期もしくは活躍期 (floruit) は紀元後 465 年に始まり, 474 年以降に続く。なお, 戸田 (1995:163,167) は, コプト文字の <ê> (エータ) に対して, 日本語において長音記号 (ー) を用いない「ベサ」という表記を用いている。

² エジプトを上エジプトと下エジプトに分けた場合は, 上エジプトに属する

³ 聖書学ではサヒド方言と呼ばれる。詳しくは, 本稿第 2 章を見よ。

⁴ ナポリ国立図書館 (Biblioteca Nazionale di Napoli) と呼ばれる。

ローマのヴァチカン使徒図書館 (Biblioteca Apostolica Vaticana)⁵ などに所蔵されている。残りは様々な図書館や博物館などの手に渡り、大多数はヨーロッパとアメリカで、そして少数はエジプトのコプト博物館で所蔵されている⁶。

確認されているテキストの分量がそれほど大量ではないこともあって、ペーサの著作の編集作業は比較的優れたものが Kuhn (1956) によってなされた。ペーサの著作は、彼の先代の修道院長である (アトリペの) シェヌーテに比べ残っているものが少ない。コプト語サイド方言のシェヌーテの著作は、古くはテキストの構成の復元は不完全ながらも、分散したページのかたまり、あるいは分散した博物館や図書館にあるコレクションなどに基づいて、Jørgen Zoëga⁷ (Zoëga 1810) や Émile Amélineau (Amélineau 1907, 1914) や Johannes Leipoldt (Leipoldt 1908, 1913) らによって転写や翻訳が出版されてきた。その後、Corpus dei Manoscritti Copti Letterari (文語コプト語写本コーパス)⁸ の成果を基に、Emmel (2004) の金字塔的著作によって写本学⁹ 的情報およびテキストの構成がまとめられ、9つのカノン (Canons)、8つのディスコース (Discourses あるいは Logoi)、および、その他の著作としてシェヌーテの著作が再構築されたものの、『第8カノン』の Anne Boud'hors によるエディション (Boud'hors 2013)¹⁰ 以外のカノンおよびディスコースはまとまったエディションが出版されていない。

筆者は現在ゲッティンゲン大学¹¹ の共同研究センター 1136¹² にて、Heike Behlmer の監督のもと、Julien Delhez と共同で、シェヌーテの『第6カノン』の編纂を行なっている。当編纂作業では、Heike Behlmer と Frank Feder が率いるゲッティンゲン学術アカデミー¹³ 「コプト語旧約聖書デジタル・エディション」プロジェクト¹⁴ で用いられている、ミュンスター大学¹⁵ の新

⁵ 通常、日本語では、単にヴァチカン図書館と呼称される。

⁶ これらの経緯については、Louis (2008) を参照。

⁷ 彼の母語であるデンマーク語に基づく表記。ドイツ語では、Georg Zoëga、ラテン語では、Georgius Zoëga である。

⁸ CMCL と略される。ローマ大学教授であった Tito Orlandi と彼のチームによって作られた、コプト語の文学写本の写本学的なデータベース。シェヌーテの写本およびテキスト研究の基礎を作った。<http://www.cmcl.it/>、最終確認日 2018 年 1 月 25 日。

⁹ 英語は codicology で、直訳ならば「冊子本学」となるが、慣例的に「写本 (manuscript) 学」と訳されている。

¹⁰ このエディションには、写本毎のテキストの転写および注、フランス語による訳、そして写本の頁の写真が含まれている。Kuhn (1956) もそうであるが、異本間の異読を検証して原文を復元する本文批評は含まれていないため、「校訂版」という語の使用は避け、ここではより広いエディションという用語を用いた。

¹¹ 正式名称は、ゲオルク・アウグスト大学ゲッティンゲン (Georg-August-Universität Göttingen)。

¹² 正式名称は、英語では、Collaborative Research Centre 1136 Education and Religion in Cultures of the Mediterranean and Its Environment from Ancient to Medieval Times and to the Classical Islam。ドイツ語では Sonderforschungsbereich 1136 Bildung und Religion in Kulturen des Mittelmeerraums und seiner Umwelt von der Antike bis zum Mittelalter und zum Klassischen Islam。

¹³ Akademie der Wissenschaften zu Göttingen。

¹⁴ Digital Edition of the Coptic Old Testament; <http://coptot.manuscriptroom.com/>。最終確認日 2018 年 1 月 27 日。

¹⁵ 正式名称は、ヴェストファリア・ヴィルヘルム大学ミュンスター (Westfälische Wilhelms-Universität Münster)。

約聖書研究センター¹⁶において Troy Griffitts と Ulrich Schmid が開発した Virtual Manuscript Room (VMR) という聖書写本の編纂のためのウェブ・アプリケーション¹⁷を用いている。

筆者は、ペーサの写本を忠実に再現した、TEI XML と Unicode によるデジタル・エディションの作成をシェヌーテの『第6カノン』と同様の方法を用いて行った。Kuhn (1956) はそれ以前に現存する唯一のペーサのエディションであり、彼はこの本で Codex A から Codex I の9つのコーデックスに含まれたテキストの転写を提供している。Kuhn (1956) はこれらのコーデックスを44の「断片」(“Fragment”)に分けた。この“Fragment”は物理的な写本の断片ではなく、一つのテキストとしてまとまりのある文章の断片である。これらの「断片」の中には1つのテキストとして完全な「断片」もあるが、ページが欠損している「断片」も多数ある。Kuhn (1956) は、一通の手紙として認められるものや一つの説教文として認められるものをこれらの「断片」に分けている。本稿の対象である「断片1」(Fragment 1)はKuhn (1956)によって「警戒/不寝番について」(On vigilance)というタイトルが付けられている。写本のページ番号、所蔵場所、所蔵番号は表1の通りである。Kuhn (1956)は今から1956年の出版であり、その頃のフォント技術の未発達から、特に発音区別符号(diacritical mark)の転写が大幅に簡略化されている。コプト語文献の発音区別符号は宮川(2014, 2016, 2017)で見たように、コプト語音韻論を論じる上で、大変重要なファクターである。この“Fragment 1”は、Kuhn (1956)ではコーデックスA, CMCL sigla では白修道院BA写本(MONB.BA¹⁸)にあたる写本のp.49からp.56のみでその断片のテキストが見つかっている。

本稿は、まず、実際の写本の写真を見ながら転写、Kuhn (1956)のエディションと照合、特に発音区別符号の補完とKuhn (1956)の誤りの訂正を行った。さらに、Leipzig-Jerusalem Transliteration (Grossman and Haspelmath 2014)に従った翻字に、記述言語学および言語類型論で標準となりつつあるLeipzig Glossing Ruleに従ったグロスを付け、訳および注も付した。このようにして、言語資料として言語学者による使用に耐えうるようにした。

2 コプト語について

コプト語(Coptic)は、アフロ・アジア語族(Afro-Asiatic)エジプト語派(Egyptian)に属するエジプト語(Egyptian)の最終段階である。通常はコプト語とよばれるが、言語学の文脈では、

¹⁶ Institut für Neutestamentliche Textforschung. 略称は、INTF。同研究所は、Nestle-Aland 版ギリシア語新約聖書(最新版は2015年に出版された第28版 Nestle et al. 2012)を編纂していることで著名である。

¹⁷ 写本に用いられる様々な記号、エクテシス、頁・柱・quire 番号、章・節番号、パリンプセストや別の書き手による箇所、書き足しや修正など、古代地中海世界の文献学で起こりうるあらゆる事象をディスプレイで再現しながら(WYSIWYGに)記述でき、さらにデジタル・ヒューマニティーズ(Digital Humanities)においてデータの記法のスタンダードとなっているTEI XML(TEI: Text Encoding Initiative, XML: Extensible Markup Language)としてデータを出力できる。VMR CRE(Virtual Manuscript Room Collaborative Research Environment)版は、ユーザのローカル環境にインストールすることができる。<http://vmrcr.org/>、最終確認日2018年1月26日。

¹⁸ これは、CMCL sigla と呼ばれ、CMCLにおいて各コーデックスごとに振られている記号である。MONBはMonasterio Bianco(イタリア語で「白修道院」)の略である。

表 1 「断片 1」の文献学的情報

ページ番号	所蔵場所	所蔵番号	出土場所
49	ナポリ国立図書館	IB 6 f. 1r	白修道院
50	ナポリ国立図書館	IB 6 f. 1v	白修道院
51	ナポリ国立図書館	IB 6 f. 2r	白修道院
52	ナポリ国立図書館	IB 6 f. 2v	白修道院
53	ナポリ国立図書館	IB 6 f. 3r	白修道院
54	ナポリ国立図書館	IB 6 f. 3v	白修道院
55	ナポリ国立図書館	IB 6 f. 4r	白修道院
56	ナポリ国立図書館	IB 6 f. 4v	白修道院

主に聖刻文字 (Hieroglyph) と神官文字 (Hieratic) で書かれた古エジプト語, 中エジプト語, 新エジプト語, および, 民衆文字 (Demotic) で書かれた民衆文字エジプト語 (Demotic Egyptian) からの連続性を強調するため, コプト・エジプト語 (Coptic Egyptian) と呼ばれることがある (Reintges 2004)。Coptic Egyptian は, アンシャル体のギリシア文字に少数のエジプト民衆文字を補填したコプト文字で書かれたエジプト語であるためコプト文字エジプト語と呼びかえることもできる。なお, ここで「エジプト語」というのは, 例えば, 現代日本語と上代日本語が属する日本語, 現代ギリシア語と古典ギリシア語が属するようなギリシア語の如く, 通時態的言語であり, もちろん, 同じエジプト語に属していても古エジプト語とコプト語では, 同源語があるものの, 文法体系がかなり異なることに注意されたい。また, 後で述べるようにコプト語内で諸方言が確認されている。コプトと言う語は, それ自体が, エジプト人を意味するギリシア語 *Aigýptios* がアラビア語に借用され, *qubṭ*あるいは *qibṭ*となり (塚本 1988:1738), それが西洋語に取り入れた形である。コプト語ではコプト語はサイド方言では, *t-aspe m-mnt-rm-n-kême* (塚本 1988:1738) と呼ばれ, 「ケメト (黒, すなわちエジプトのナイル川流域の黒土を表し, エジプトを指す) の人の言葉」を意味する。また, 単に, *aspe* 「言葉」とそれに付く女性単数定冠詞 *t*-を省略して, *t-mnt-rm-n-kême* の語が用いられることがある。コプト語サイド方言では *mnt*-は抽象名詞化の接辞だが, コプト語以前のエジプト語における同源語である *mdt* (古・中・新エジプト語), あるいは *mt* (民衆文字エジプト語) は, Černý (1976:85) によれば “speech, matter” を表す。

コプト語には, 紀元後 4 世紀までを中心にマニ教文献, グノーシス主義文献, ヘルメス主義文献のみならずプラトーンの『国家』(ナグ・ハマディ第 6 写本中) やホメーロスの『イーリアス』(P.Oxy.68 6B.39/C (2-5) b) などの非キリスト教文献の翻訳が残っているものの, コプト語の literary¹⁹ な文献のほとんどはキリスト教関係である。コプト語ボハイラ方言は, 現在で

¹⁹ パピルス学用語である documentary に対する用語。

もコプト・キリスト教²⁰の典礼言語として用いられている。ギリシア語からの借用語は他のエジプト語の諸段階と比べ圧倒的に多い。

コプト語には、ボハイラ方言(ボハイル方言)²¹、ファイユーム方言、オクシュリユンコス方言(中部エジプト方言)、サイド方言(サヒド方言)、リュコポリス方言(準アクミーム方言)²²、アクミーム方言などの方言がある。多くの文献を有し、ベーサやシェヌーテも用いたサイド方言は、日本語による聖書学の用語では、サヒド方言と呼ばれる²³。これは英語の Sahidic、もしくは(おそらくこちらの方が可能性が高いが)ドイツ語の Sahidisch の音を日本語に借用したものだと思われる。しかしながら、元になったアラビア語の語は、「(ナイル)上流/上エジプト」を表す名詞 *ṣaʿīd* [sʰaʿiːd] の形容詞形、*ṣaʿīdī* [sʰaʿiːdiː] である。これにおいて、英語 Sahidic における、Sa と idic の間の h はアラビア語では有声咽頭摩擦音 [ʕ] に対応する。西欧語で、h が書かれるようになったのは、有声咽頭摩擦音の代わりに、声門閉鎖音で読まれる h を用いた教会ラテン語もしくはフランス語の *sahidique* から h を付した綴りが広まったためかもしれない。日本のアラビア語学でもエジプトの南部のアンミーヤをアラビア語に近い音であるサイド方言と表記している。なお、日本の言語学の集大成の一つである『言語学大辞典』では、コプト語の方言として、アラビア語の音に近いサイド方言が用いられている(塚本 1988:1739-1740)。聖書学の用語に合わせるべきか、言語学の用語に合わせるべきか悩ましいところであるが、筆者はこれまで、言語学の著作では言語学の用語である「サイド方言」を用いている。

3 特筆すべき文法現象

なお、以下では、Leipzig Glossing Rules にない、コプト語特有の文法現象について説明する。本テキストで 1, 2 例しか出てこないものに関しては、訳注で随時説明する。ここでは、特にコプト語のテキストをグロス付きで読むときに重要であろう点について解説する。

3.1 Status

Status は、コプト語文法の中でも最も特徴的な言語現象であり、接続詞や小辞を除いてほぼ全ての品詞で見られる。Status は絶対形 (*status absolutus* あるいは *absolute state*) と拘束形 (*bound state*) に分かれ、拘束形はさらに名詞接続形と代名詞接続形に分かれる。絶対形は自由形態であるが、拘束形は拘束形態であり、その形態のみでは語として独立して成立し得ない。絶対形、名詞接続形、代名詞接続形はそれぞれ形態が異なる。名詞接続形 (*status nominalis* /

²⁰ 英語では、Coptic Christianity。コプト正教会 (Coptic Orthodox Church of Alexandria)、コプト・カトリック教会 (Coptic Catholic Church) など。

²¹ 現在のコプト・キリスト教の典礼では、このボハイラ方言が用いられる。ボハイラ方言には、B4 方言やニトリア・ボハイラ方言など下位方言が存在する。

²² マディーナト・マーディー出土のマニ教文献 (L4 方言) やケリス出土の文献 (L*方言)、ナグ・ハマディ写本群中の『闘技者トマスの書』など一部 (L6 方言) など、宗教学的に重要な文献を有する。

²³ 辻 (2016) は「サヒド方言」を用いている。

prenominal state²⁴) はセム語学の用語から status constructus あるいは construct state, 日本語では「連語形」(小脇 2013:69) あるいは「構築形」と呼ばれ, 主に名詞句あるいは限定詞句の直前に来た場合に現れる status であり, それ自体にアクセントを持たない。²⁵ 名詞接続形は, 接尾代名詞以外²⁶ の, 名詞化されたと見なされる他の品詞の前にも置かれうる。これに対して, 代名詞接続形 (status pronominalis / prepronominal state²⁷) は二人称複数 *têutn* を除く接尾代名詞の前のみに来る形である。以前, 筆者は prenominal state 並びに prepronominal state の訳語として, 「前名詞形」並びに「前代名詞形」を用いていたが, この訳であると, 動詞が「名詞」あるいは「代名詞」に変化する前のものであるような印象を与えかねない。北海道大学准教授の戸田聡氏は, 「名詞接続形」並びに「代名詞接続形」という, より日本語として自然な訳を授業などで用いており, 今回, 筆者はこの訳語を用いることにする。この訳語はラテン語の status nominalis および status pronominalis の訳出であると考えられる。ただし, これでは, より新しい用語である英語の prenominal state 並びに prepronominal state の接頭辞 pre- が表す, 接続の方向性が訳出されていないことになる。その点, 「名詞接頭形」, 「代名詞接頭形」なども考えられるが, prenominal state および prepronominal state の動詞はほとんどの場合単なる接頭辞ではないため, 接頭という訳語²⁸ を用いるのは憚られる。他方, コプト語では, 主要部が従属部の前に来ることが多いことから, 「名詞接続形」だけでも実用的な基準には達していると思われる。そのため, 本稿では戸田氏の訳語の方が優れていると判断し, status nominalis あるいは prenominal state の訳語に「名詞接続形」, status pronominalis あるいは prepronominal state の訳語に「代名詞接続形」を用いる。このように, コプト語の文法用語は日本語では定訳²⁹ が定まっていない。そのため, 文法用語の訳語の整理・統一が待たれる。

なお, 代名詞は, それ自体アクセントを持たない拘束形態である接尾代名詞とアクセントを持つ自由形態である独立代名詞がある。例, 接尾代名詞 *-f* 「彼」, 独立代名詞 *ntof* 「彼」。名詞接続形はアクセントを失うが, 代名詞接続形はアクセントを保持する。「~形」が status あるいは state に対応する訳語とするのは, 他にも訳語「~形」に対応する form などの語があるので, 再考すべきであるが, 他に良い訳語がないため, 小脇 (2013) など日本語における主なヘブライ語文法にしたがって, ここでは status あるいは state を「~形」と訳す。コプト語の status の変化は母音によるものが多い。表 2 は, 動詞 *solsl* の変化である。

この母音の変化は様々なパターンがある。名詞接続形の時では絶対形ではアクセントを持っていた母音がアクセントを持たない母音 <e> /ə/ になったり, 母音を失ったり, 代名詞接続形の時

²⁴ ラテン語では nominalis だが, 英語では, 名詞の前に来る形であることから, 通常は nominal に接頭辞 pre- を付ける。

²⁵ Plumley (1948:§140) は construct state を名詞接続形のみを用いている。また Brankaer は名詞接続形と代名詞接続形を合わせて Bound State と呼称している (Brankaer 2010:119-120)。

²⁶ ただし, 二人称複数の *têutn* は後で述べるように, 代名詞接続形ではなく, 名詞接続形をとる。

²⁷ status nominalis あるいは prenominal state と同様, ラテン語では pronominalis だが, 英語では, 代名詞の前に来る形であることから, 通常は pronominal に接頭辞 pre- を付ける。

²⁸ *eire* 「する」の名詞接続形 *r-* を名詞を動詞化する接頭辞と考えられないこともない。

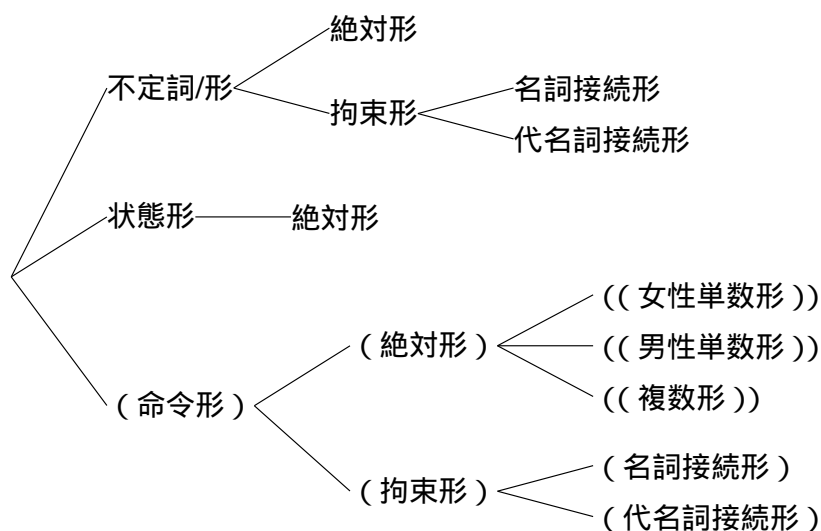
²⁹ 英語でさえも, 特に助動詞において文法家によって異なる用語が用いられる。

表 2 動詞の活用 (Plumley 1948:140)

status	例文	グロス	訳
絶対形	<i>a-f-solsl</i>	過去-三 ^{単男} -慰め(られ)る	「彼は慰めた」或いは「彼は慰められた」
名詞接続形	<i>a-f-sls-pe-n-son</i>	過去-三 ^{単男} -慰める _名 -所有 ^{単男} -一 ^複 -兄弟 ^男	「彼は我らの兄弟を慰めた」
代名詞接続形	<i>a-f-slsôl-s</i>	過去-三 ^{単男} -慰める _代 -三 ^{単女}	「彼は彼女を慰めた」

は絶対形で tense の母音であったものが lax の母音になったりする。逆のパターンもある。他に、代名詞接続形で子音 *-t* の付加が起きる動詞もある。例としては、動詞 *fi-* (絶対形 *fi*, 名詞接続形 *fi-*, 代名詞接続形 *fit-*) 「取って来る」³⁰ が挙げられる。これらの形態音韻論的变化はパラダイム化、並びに、パターン化できる。例えば、Plumley (1948:§146-177) や Layton (2011) にその表がある。図 1 において、動詞の status の分類を示した。

図 1 動詞体系：宮川 (2016) の改定版。一重括弧は少数を、二重括弧は極少数を意味する。



前置詞や動詞において、2 人称複数接尾代名詞で *-tn* ではなく *-têutn* が用いられた時は名詞扱いとなり、その前の動詞や前置詞は代名詞接続形ではなく名詞接続形が用いられる。例、*oueh-têutn* (置く_名-二^複) 「君らを置く」。なお、動詞の命令形は少数であり、命令形において性数の変化があるものもあるが、それは極少数である。特別な命令形をその動詞が有する場合、

³⁰ このように、いわゆる辞書形としては絶対形が用いられる。

その命令形の形成は命令形形成接頭辞 *a-* でなされるものも多い。動詞に類するものとしては、他に、準動詞 (verboïd) と呼ばれるものがある。これは、名詞接続形と代名詞接続形のみを持つ動詞で、性質や状態を表すことが多い。通常、名詞接続形と代名詞接続形の後に来る名詞/代名詞は目的語となることが多いが、準動詞の場合はそれらは主語となる。例: *nanou-f* (良い-三^{単男}) 「それ/彼は良い」。

3.2 転換詞 (converter)

転換詞は、助動詞または、現在形の代名詞の前につく品詞で、テンスを一段階前にするものや、副詞句の焦点化を表すものなど、様々である。要は、ある節 (clause) にある機能を持たせるものである。古くから副詞句焦点化の転換詞は機能が不明であったが、Hans Jakob Polotsky の構造主義的研究によって副詞句焦点化の機能があることが明らかにされ (Polotsky 1944) , 現在多くの文法で概ねこの説が採用されている。転換詞の一覧を表 3 で示す。

表 3 転換詞の一覧

機能	中立形	名詞の前のみ	過去標識 <i>a-</i> の前のみ
関係節化 (relative)	<i>e-, ete-</i>	<i>etere-</i>	<i>nt-, ent-</i>
状況節化 (circumstantial)	<i>e-</i>	<i>ere-</i>	
(副詞句) 焦点化 (focalizing)	<i>e-</i>	<i>ere-</i>	<i>nt-</i>
前時化 (preterit) ³¹	<i>ne-</i>	<i>ner-</i>	

3.3 ギリシア語からの借用語

コプト語にはギリシア語からの借用語が大量に存在する。しかも、様々な品詞に登場する。これらはコードスイッチングや引用ではない。今回の文献であるベーサの「断片 1」で登場したギリシア語からの借用語の頻度は 112 (token) であった。品詞別の頻度と割合を以下の表 4 で示す。

表 4 ギリシア語からの借用語における品詞

品詞	名詞	動詞	副詞	前置詞	接続詞	小辞	総計
頻度 (延べ数)	50	15	1	3	24	19	112
割合 (頻度/総計, 小数点第一位四捨五入)	45%	13%	1%	3%	21%	17%	100%

所謂「開いたクラス (open class)」と呼ばれ、借用が起こりやすいと言われる名詞、動詞、副

²⁹ 時制を一つ前にする。例えば、時制が現在であるならば、過去に変える。

詞だけでなく、「閉じたクラス (closed class)」と呼ばれ借用がされにくいとされる前置詞、接続詞、小辞にも借用が生じていることがわかる。

3.4 格標識

格標識には、通常接頭前置詞である。基本的な接頭前置詞としては、表5のようなものがある。コプト語の接頭前置詞には様々な意味・機能があるため、これらの基本的な接頭前置詞には、言語資料のグロスに一貫性を持たせ、簡潔にするための都合上、「～格」という名称を付してある。これは屈折語の格接辞ではないことに注意していただきたい。このような、グロスにおける格の付与は、言語類型論でコプト語例文をグロス付きで用いる際に Eitan Grossman らによって行われている。なお、*nci-*を主格とするのは Grossman (2014:208) のアイデアである。また、与格接頭前置詞名詞接続形と属対格接頭前置詞名詞接続形は同形である。

表5 主な格標識・接頭前置詞

グロス	名詞接続形	代名詞接続形	主な意味 (Brankaer 2010:31 を参考にした)
主格	<i>nci-</i>	—	「～が」
属格	<i>n-te-</i>	<i>nta-</i>	「～の」
属対格	<i>n-</i>	<i>m-mo-</i>	「～の」「～を」「～で(時間)」「～から」「～を用いて」
与格	<i>n-</i>	<i>na-</i>	「～へ」「～に」
向格	<i>e-</i>	<i>ero-</i>	「～に」「～のために」(不定詞を伴って)「～することを」「～よりも」
所格	<i>hn-</i>	<i>nhêtn-</i> ³²	「～で」「～において」「～の中で」
共格	<i>mn-</i>	<i>nmma-</i>	「～と」
上格 ³³	<i>hi-</i>	<i>hiô(ô)-</i> ³⁴	「～で」「～の上で」「～と」
下格 ³⁵	<i>ha-</i>	<i>haro-</i>	「～の下で」「～で」

³⁰ *n-hêt-* (属対格^名-腹^代-) と分解できる。

³¹ ハンガリー語などにあり、記述言語学で用いられる superlative (上格) を用いた。なお、本文でも述べたように、これらの接頭前置詞のグロスに用いた「～格」という名称は暫定的である。通常は「～格」はコプト語の伝統的な文法ではあまり用いられないが、Eitan Grossman らは、近年、言語類型論や記述言語学の分野でコプト語の例文のグロスを簡潔にするためにグロスにて nominative, accusative, genitive などの格の名称を用いている。これらの接頭前置詞には様々な意味がある。例えば、*hi-*には「～の上で」の基本的な意味の他に「～と」という共格的な意味になる場合もあり、グロスを一貫して付すために便宜的にハンガリー語などで用いられている「上格」を用いた。

³² *hi-ôô-* (上格^名-背^代-) と分解できる。

³³ 記述言語学で用いられる sublative (下格) を用いた。

属格 *nte-* はボハイラ方言ではよく使われるものの、サイド方言ではあまり使われない。Haspelmath (2014) は、*nte-*^名・*nta-*^代 を用いた所有構文を Short Possessive Construction, 属対格の *n-*^名・*mno-*^代 を用いた所有構文を Long Possessive Construction と呼んでいる (Haspelmath 2014:264-266)。また、リンカーの *n-* もある、これは属対格の属格用法に含めることもできるが、含めないこともできる。形容詞的名詞とそれに修飾される名詞、および 3 以上の数詞とそれに修飾される名詞を繋ぐ。他には、主格の *nci-* は動詞や目的語の後に置かれるが、Grossman (2014) はこの *nci-* を実際の主語の位置だと見ている。これらの前置詞は接頭辞であるのか前接語であるのか議論がある。Grossman (2018) は接頭辞であるとしているが、筆者は接語であるという立場に傾いている。つまり、これらの名詞接続形の前置詞は名詞に付いてアクセントを失うため、それ自体では音韻語³⁶ にはなり得ないが、長大な限定詞句を従属部にした前置詞句の主要部となりうるため、それ自体は文法語であるとする立場である。ただし、このような議論は「語」の定義によって左右される。Haspelmath (2011) はそもそも「語」自体がユニバーサルには定義不可能であり、言語類型論などの議論においては成り立たないことを主張している。Haspelmath 自身、コプト語は「語」の定義が特に成り立ちにくい言語の一つだと主張している (Haspelmath 2016)³⁷。なお、これまでコプト語の文法書では、接頭前置詞の格の名称はあまり使われなかったが、Grossman を中心に格の名称を用いて、類型論的議論を容易にしようとする傾向がある。本稿ではグロスと説明のやりやすさのために、複合前置詞を形成する基本前置詞のうち、よく使われるものに、これらの格の名称を使用する。これらの格の名称は発展段階である。これらの接頭前置詞は主に身体部位名詞と組み合わせられて複合前置詞を形成する。複合前置詞のうちよく使われるものを表 6 で紹介する。

コプト語にはギリシア語から借用された前置詞が存在する。ギリシア語から借用された前置詞は、代名詞接続形を持つものと持たないものの 2 つに分けられる。表 7 でギリシア語から借用された主な前置詞を挙げる。

3.5 再呼代名詞

再呼代名詞とは関係節の中で用いられる先行詞と呼応する代名詞である。日本語において、「私が使ったペン」というときに、コプト語においては、「私が それを 使ったペン」と言ったようになり、この「それを」が再呼代名詞に当たる。この再呼代名詞は、目的語だけでなく、主語、場所、時など様々な文法要素において用いられる。なお、性・数は先行詞に一致する。例：*n-n-ent-a-ne-n-eiôt čoo-u* (属対格^名-定^複-関係節化-過去^名-所有^複-複-父^複 言う^代-三^複)「我らの父祖たちが言ったもの (lit. 我らの父祖たちがそれらを言ったもの)」(本稿の言語資料中にあるベーサ「断片 1」第 5 章第 1 節より)。

³⁶ 音韻語と文法語については Dixon and Aikhenvald (2002) を見よ。

³⁷ この問題は宮川 (2017) において分析した。

表 6 複合前置詞のうちの主なもの

名詞接続形	代名詞接続形	意味 (Brankaer 2010:32-33 を参考にした)
<i>n-sa-</i> 属対格 ^名 -側 ^名 -	<i>n-sô-</i> 属対格 ^名 -側 ^代 -	「 ~ の後で」
<i>e-tn-</i> 向格 ^名 -手 ^名 -	<i>e-toot-</i> 向格 ^名 -手 ^代 -	「 ~ に」「 ~ に向かって」
<i>n-tn-</i> 属対格 ^名 -手 ^名 -	<i>n-toot-</i> 属対格 ^名 -手 ^代 -	「 ~ で」「 ~ と」「 ~ の隣に」「 ~ から」
<i>ha-tn-</i> 下格 ^名 -手 ^名 -	<i>ha-toot-</i> 下格 ^名 -手 ^代 -	「 ~ で」「 ~ と」「 ~ の隣に」「 ~ から」
<i>e-hrn-</i> 向格 ^名 -顔 ^名 -	<i>e-hra-</i> 向格 ^名 -顔 ^代 -	「 ~ に向かって」「 ~ の間で」
<i>na-hrn-</i> 与格 ^名 -顔 ^名 -	<i>na-hra-</i> 与格 ^名 -顔 ^代 -	「 ~ の前で」
<i>ha-htn-</i> 下格 ^名 -心臓 ^名 -	<i>ha-(h)tê-</i> 下格 ^名 -心臓 ^代 -	「 ~ の隣で」「 ~ と」
<i>e-čn-</i> 向格 ^名 -頭 ^名 -	<i>ečô-</i> 向格 ^名 -頭 ^代 -	「 ~ の上で」「 ~ に」「 ~ に対して」「 ~ の後で」
<i>hi-čn-</i> 上格 ^名 -頭 ^名 -	<i>hičô-</i> 上格 ^名 -頭 ^代 -	「 ~ の上で」「 ~ の上に」「 ~ で」「 ~ の中で」

表 7 ギリシア語から借用された前置詞のうちの主なもの

名詞接続形	代名詞接続形	主な意味 (Brankaer 2010:32 を参考にした)
<i>kata-</i>	<i>katáro-</i>	「 ~ によれば」「 ~ のあとで」
<i>para-</i>	<i>paráro-</i>	「 ~ と比較して」「 ~ よりも」
<i>pros-</i>	<i>prosro-</i>	「 ~ に応じて」「 ~ よりも」
<i>k^hôris-</i>	—	「 ~ なしで」
<i>hôs-</i>	—	「 ~ のように」

3.6 小辞

コプト語には小辞あるいは不変化詞 (particle) と呼ばれる品詞が存在するが、これは典型的なヴァッカーナーゲル・クリティック³⁸ である。このヴァッカーナーゲル・クリティックは、古典ギリシア語やタガログ語など語族に関わらず様々な言語に見られる。コプト語の小辞の使用法は、コイナー・ギリシア語のそれとほぼ同じである。コプト語の小辞の多くは、*gar*, *de* など、コイナー・ギリシア語からの借用語であるが、*ce*, *on* など、エジプト語本来語もある。

3.7 受け身

状態受け身と呼べるような静的な受け身は、動詞の状態形で主に表されるが、動的な動詞の意味的な受け身は主に非人称の 3 人称複数代名詞を用いて表される。例：*se-kôt mmo-f e-bol*

³⁸ 文中の第二位置に来て、それ自体はアクセントを持たない接語のこと。

hi-tn-ta-maau. (三^複-建てる^絶 属対格^代-三^{単男} 向格^名-外側^絶 上格^名-手^名-所有^{単女}-一^単-母) 「それは私の母によって建てられている。(lit. 彼ら(非人称)は私の母の手でそれを建てている。)」(Layton 2011:136)。

4 本文

4.1 転写方法

本文には写本に基づく精密な転写, 翻字を記した後, 翻字に形態の境界, 各形態のグロスおよび各音韻語の語釈を付し, 最後に全体の訳を示した。また, ギリシア語からの借用語にはそのグロスに^キを付した。改行は|で表した。また, 列が1ページに2列あるため, 改列は||で表し, 改ページは|p.(ページ数)|で表した。なお, 節や章, パラグラフの番号は, Kuhn (1956)に従った。彼は判断方法を書いていないが, 大まかには, コプト語写本に書かれた段落 footnote エクテシス (ekthesis / 稀に ecthesis), すなわち, マージンにはみ出た大きな文字で段落の冒頭が示されている。MONB.BA の場合は, エクテシスはあまり大きめではない。を用いていることが多いが, 完全に写本の段落と一致するわけではなく, 彼が文章の内容を判断してつけたと思われるものも多数ある。ペーサに関しては, Kuhn のエディションと英訳はあるものの, 言語学の資料となる, グロス付き言語資料はない。本稿のグロスはライプツィヒのマックス・プランク進化人類学研究所 (Max-Planck-Institut für evolutionäre Anthropologie) にあった言語学の Leipzig Glossing Rules³⁹ を参考にしたが, 日本語で行ったため, L^AT_EX のデフォルトでドットに続けて文法素性を書くとスペースが開き, 美しく映らなかった。そこで, 性・数・status とギリシア語由来の形態素かどうかに関してのグロスには, 意味表記の右肩に小さな文字で略号を付した。略号やその他の記号に関しては, 本稿の参考文献一覧の前にある, 略号一覧および凡例を参照いただきたい。

前述したことだが, Kuhn (1956) の時代のコプト文字フォントは原始的なものであり, エクテシスの表示や細かなダイアクリティカル・マークを省き, スープリニアーストロークの位置を極端に単純化している。そこで, 本稿はナポリ国立図書館 (Bibliotheca Nazionale di Napoli) に所蔵されている写本を見ながら, Steven Emmel と Michael Everson が開発したユニコードコプト語フォントである Antinoou⁴⁰ を使用して, 現代のフォント技術で出来る限り正確な書き起こしを行い, 文字論や音韻論の資料としての実用性をも目指したただし, 本稿は pL^AT_EX で書かれているため, そのままでは, Antinoou が使用できない。もちろん, X_gL^AT_EX や LuaL^AT_EX を用いれば, Antinoou を表示させることができる。しかし, X_gL^AT_EX では, 日本語が美しく表示されず, LuaL^AT_EX では, 多種多様なスープリニアーストロークが出力できなかった。そこ

³⁹ <https://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php>, 最終確認日 2018年1月26日

⁴⁰ <https://www.evertype.com/fonts/coptic/>, 最終確認日 2018年1月26日。

で、初めは、Antinoou で書いたテキストを `coptic.sty`⁴¹ の記法⁴² で書き直し、表示することを試みた。フォントは Serge Rosmorduc によって METAFONT を用いて開発された `coptic.sty` のものであり、近年よく使われている Antinoou, New Athena Unicode⁴³, IFAOGrec Unicode⁴⁴ などではない。しかしながら、様々な長さのスーパーリニアーストロークやディプレーなどの各種記号を表示するのに支障が出たため、今回は、Antinoou で書いたテキストを別に Xe_{La}TeX で作成し、出力した PDF を逐一、 \LaTeX で書かれた本文に埋め込んだ。

スーパーリニアーストローク⁴⁵ は、機能としては聖名 (Nomina Sacra) の省略および、音節の表示の機能がある。前者は、翻字では、Grossman and Haspelmath (2014) に従い、省略されている字を () で表示し、後者に関しては、宮川 (2014, 2016) で議論されているように音節子音説とシュワー挿入説の 2 説があってどちらかに決着していない他、Grossman and Haspelmath (2014) のルールでは書かないことになっており、表示しなかった。また、Grossman and Haspelmath (2014) に従い、機能が完全に解明されていないサーカムフレックス、上点、アポストロフィのような記号、中点は表示していない。このように、Grossman and Haspelmath (2014) は翻字 (transliteration) と自称するものの、機能が完全に解明されていないものに関しては、表示することを避けている。しかし、機能が解明しているうちに翻字を試みると、適切な翻字ができない可能性がある。そのため、これらの発音区別符号および句読点の機能の解明が待たれる。なお、これら、Grossman and Haspelmath (2014) では表示しなかった諸記号は、本稿の言語資料においてコプト文字で転写した。よって、これらの記号に関しては、コプト文字転写をご覧頂きたい。

なお、`˘` は、一般的にニュー線 (ny-line) と呼ばれ、行末に書かれ、ニュー<n>の省略を示す。また、`ˆ` はディプレー (diplē) と呼ばれ、文の脇のマージンに書かれ、文章の強調や、引用であることの指示、コロフォンであることの表示など様々な機能を有する。`¶` は、段落記号 (paragraphos) であり、段落の冒頭周辺を示している。ただし、空白を埋めるため、段落の初めの 1 つあるいは、幾つかの語が前の段落の末尾に書かれ、次の行の先頭で段落記号が書かれることがある。実際は、`¶` のような形ではなく、横線に、横線の右の端もしくは中心から左下へ向かって伸びる線を加えたものであることが多い。動物や植物などの装飾を持つ場合もある。本稿が対象とする写本では、図 2 でも見られるように、羽らしき装飾を有していることが多々あった。この段落記号の後の文字は大きく書かれたり (エクテシス)、左の余白にはみ出ている

⁴¹ <https://ctan.org/tex-archive/language/coptic/cbcoptic?lang=en>, 最終確認日 2018 年 1 月 26 日。

⁴² Beccari and Pulone (2004: 136-140) を見よ。

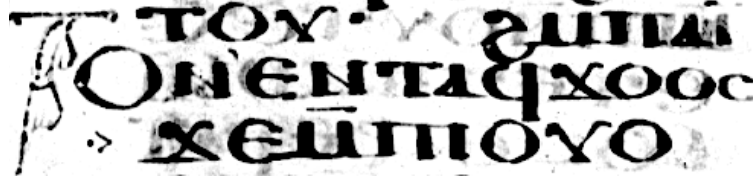
⁴³ <https://apagreekkeys.org/NAUdownload.html>, 最終確認日 2018 年 1 月 26 日。

⁴⁴ <http://www.ifao.egnet.net/publications/publier/outils-ed/polices/>, 最終確認日 2018 年 1 月 26 日。IFAO はカイロにあるフランス東洋考古学研究所 (Institut français d'archéologie orientale) の略称である。なお、IFAO は Ifao N Copte も配布しているが、こちらは ASCII の文字列をフォントレベルでコプト文字に見えるようにしたただけのものであり、Unicode にあるコプト文字専用の符号を用いたものではない。

⁴⁵ 字の上に書かれる線。

ことが多い。本稿のコプト語転写では、写本で文字が特段大きく書かれている場合は、転写でも文字を大きくした。

図 2 段落記号 (左端): 段落自体は *hmpai* から始まる。白修道院 BA 写本 49 頁より。所蔵番号は表 1 にある通り、IB 6 f. 1r である。



グロスは、Crum (1999) の辞書において分かる限りのものを付した。名詞の複数形については、持たないものが多く、また、特別な複数形を持つものでも、単数形が複数の意味でも使われることもあるから、複数形が用いられている時にのみ、名詞の単複の表示をした。ギリシア語の名詞に関しては、特に中性に関して不明確であることから、ギリシア語における性と数を示した。ギリシア語は男性・女性・中性の 3 つの性があるのに対して、コプト語は男性と女性の 2 つのみである。また、コプト語には、ギリシア語と異なり、複数において性の区別はなく、性の区別があるのは単数のみである。

引用箇所については、Kuhn (1956) が発見した引用箇所以外の引用箇所は発見できなかった。聖書の引用や引喩箇所においては、元の聖書の句を注に載せた。新約聖書はギリシア語の校訂版 (Nestle et al. 2012) (ネストレ=アールント第 28 版) と日本語訳 (共同訳聖書実行委員会 2001) (新共同訳) が、旧約聖書は、聖書のコプト語訳は、ヘブライ語原文ではなく、通常ギリシア語の 70 人訳を元になされたため、70 人訳のギリシア語本文 (Rahlfs and Hanhart 2014) とその英語訳 (Pietersma and Wright 2007) (NETS: New English Translation of Septuagint) を用いた。引用箇所では、Pietersma and Wright (2007) を “NETS”, 共同訳聖書実行委員会 (2001) を「新共同訳」、Nestle et al. (2012) を「ネストレ=アールント第 28 版」として簡略化して記した。聖書の章と節の番号から、どの部分を引用したかが明白であるため、ページ番号は、これらの聖書のテキストに限っては、必要なもの以外は省略している。

第 1 章

- (1) a. [αἰρωτῆ τε] | p.49 | > τῆς δόξης | > ζε εἰς πᾶν κόσμον ἢ ἐνετονε
 [ahrô-tñ te] | tn-dogmatize hm-p-kosmos n-t^he
 なぜ^代-二複 二複-服従する^キ 所格^名-定^{単男}-世界^キ 属对格^名-定^{単女}-様態^{単女}
 なぜ君らは 君らは服従する 世界に ように
 n-n-et-onh
 属对格^名-定^複-関係節化-生きる^状
 生きている者たちの

「[なぜ君]らは生きている者たちのように世に服従しているの [か]。」(『コロサイの信

徒への手紙』 2:20)

b. |> ἴπρ̄χωχ οὐ|>τε ἴπρ̄χι|πε. |> οὐτε ἴπρ̄χῶ| εροϋν·

mpr-čôh oute mpr-či-t'pe oute mpr-hôn e-houn
 禁止-触る^絶 そして~ない^干 禁止-受ける^名-味^{絶女} そして~ない^干 禁止-近づく^絶 向格^名-内側^{絶男}
 触るな そして~ない 味わうな そして~ない 近くな 内側へ

「触るな，味わうな，近づくな。」(『コロサイの信徒への手紙』 2:21)

c. ετε|παῖ πε χεαν|εἰ εβολ ἑν̄ν̄|νοβε ἴπκο|σμος εανκα|αγ ἴσων·

ete-pai pe če-a-n-ei e-bol hn-n-nobe
 関係節化-指示^{絶単男} 繫辞^{単男} 引用節化-過去^代-^一複-来る^絶 向格^名-外側^{絶男} 所格^名-定^複-罪^{絶男}
 これが~もの である 私たちが来たという事 外側へ 罪で
m-p-kosmos e-a-n-kaa-u n-sô-n
 属对格^名-定^{単男}-世界^{干男} 状況節化-過去^代-^一複-置く^代-^三複 属对格^名-側^代-^一複
 世界の 私たちがそれらを置きながら 私たちの後で

これは，我らが世の罪を捨て去りそれらから離れた，ということだ。

d. αρρ̄|ον ενκτ̄ῶ ἴ|μον ενσλομ|λῆμ ἑραι ἴρη|τοϋ·

ahro-n on e-n-cto mmo-n e-n-clomlm
 なぜ-^一複 小辞 状況節化-^一複-向かせる^絶 属对格^代-^一複 焦点化^代-^一複-巻き込まれる^絶
 なぜ我らは また 我らは向かせる 我らを 我らは巻き込まれる
hrai nhêt-ou
 上/下側に 所格^代-^三複
 上/下側に それらで

どうして我らは，また，立ち返ってそれらに巻き込まれているのだろうか。

注釈

- a. 前のページが欠如しているため，冒頭が不明であるが，Kuhn (1956) は，引用部分である『コロサイの信徒への手紙』第2章第21節のコプト語サイド方言訳をもとに，*ahrôtṁ te-*と再建している。
- b. 新約聖書中の『コロサイの信徒への手紙』第2章第21節中に書かれてある，ある戒律の引用をさらに引用していると思われる。
- コプト語サイド方言によるコイナー・ギリシア語新約聖書の古代末期の訳:
 “2:20 *ešče atetnmou mnpek^h(risto)s ebol hnnestoik^hion mpkosmos. ahrôtṁ tetndogmatize hmpkosmos n^he nnetonh. 2:21 *mprčôh oude mprčit'pe. oude mprhôn ehoun.*” (『コロサイの信徒への手紙』第2章20節-第21節 Thompson (1932))*
 - コイナー・ギリシア語新約聖書 “2:20 Εἰ ἀπεθάνετε σὺν Χριστῷ ἀπὸ τῶν στοιχείων τοῦ κόσμου, τί ὡς ζῶντες ἐν κόσμῳ δογματίζεσθε· 2:21 μὴ ἄψη μηδὲ γεύση μηδὲ

ἰσχυρός,” (『コロサイの信徒への手紙』第2章20節-第21節 ネストレ=アーラント第28版)

- コイナー・ギリシア語新約聖書の日本語訳「2:20 あなたがたは、キリストと共に死んで、世を支配する諸霊とは何の関係もないのなら、なぜ、まだ世に属しているかのように生き、2:21「手をつけるな。味わうな。触れるな」などという戒律に縛られているのですか。」(『コロサイの信徒への手紙』第2章20節-第21節 新共同訳)
- 共同訳聖書実行委員会(2001)は、ἐν κόσμῳがζῶντεςを修飾していると解釈して和訳しているが、コプト語サイド方言訳はἐν κόσμῳをδογματίζεσθεの従属部として解釈している。

b.-c. *e-houn* および *e-bol* は前置詞句であるが、語彙化した副詞としても解釈できる。Coptic SCRIPTORIUM⁴⁶ (<http://copticcriptorium.org/>, 最終確認日 2018年1月27日) や Brankaer (2010:35) などは副詞としている。

第2章第1節

(2) a. ἡμπαὶ |¶ Οὐ ἐνταφχοος |▷

hm-pai on ent-a-f-čoo-s

所格^名-指示^{単男} 小辞 関係節化-過去^{代-三単男}-言う^{代-三単女}

これにおいて さらに 彼が言った(関係節)

これにおいて、彼(パウロ)が言った事。

b. χεῖμπιοῦ|▷εἰω γαρ νετε|▷τῆνὸ ἦκακε |▷ πε· τενοῦ |▷ δε ἡνοῦεῖν |▷ ἡμπχοεῖς

če-m-pi-ouoeiś gar ne-tetn-o n-kake

引用節化-属对格^名-感情的指示^{単男}-時^絶 小辞^キ 前時化-二複-する/ある^状 属对格^名-闇^絶

曰く、あの時に~と

だが 君らが~あった

闇で

pe te-nou de n-ouoein hm-p-čoeis

繫辞^{単男} 定^{単女}-時^{絶女} 小辞^キ 属对格^名-光^{絶男} 所格^名-定^{単男}-主^{絶男}

前時化転換詞と呼応 今や だが 光で 主において

曰く、「ある時、君らは闇であったが、今や主において光である。

⁴⁶ コプト語サイド方言のウェブ・ベースの文学テキスト・コーパスである。Schroeder and Zeldes (2016) を参照せよ。ANNIS (ANNotation of Information Structure) というフンボルト大学ベルリン (Humboldt-Universität zu Berlin) のチームが基となって開発したコーパス表示アプリを用いており、ANNIS クエリ言語を用いて、詳細で複雑なコーパス言語学的検索を行うことができる。KELLIA プロジェクトとも連動し、ANNIS に表示されたレンマをクリックすれば、KELLIA で作成された Coptic Dictionary Online (<https://corpling.uis.georgetown.edu/coptic-dictionary/>, 最終確認日 2018年1月27日) の当該語のページに飛ぶことができる。

c. |> μοοφε ρως |> φηρε ἱπου|>οειν·

moošē hōs šēre m-p-ouoein
 歩む^絶 として^干 子^男 属対格^{名-定^{単男}-光^{絶男}}
 歩め として 子 光の

光の子として歩め。

d. ερε|πκαρπος γαρ || ἱπουοειν | ρμηπετνανουφ | νιμ μνητδι|καιοςυνη μνη|τμε· ετετη|δοκιμαζε
 χε|οϋ πετρᾶναφ | ἱπχοεις·

ere-p-karpos gar m-p-ouoein hm-p-et-nanou-f
 焦点化^{名-定^{単男}-実^{干男}} 小辞^干 属対格^{名-定^{単男}-光^{絶男}} 所格^{名-定^{単男}-関係節化-良い(準動)^{代-三^{単男}}}
 実が~ある というのは 光の 良いものの中で
nim mn-t-dikaiosunê mn-t-me
 あらゆる 共格^{名-定^{単女}-正義^{干女}} 共格^{名-定^{単女}-真理^{絶女}}
 あらゆる 正義と 真理と

というのは, 光の実は, 全ての善, 正義, 真実の内にあるからだ。

e. ετετη|δοκιμαζε χε|οϋ πετρᾶναφ |> ἱπχοεις·

e-tetn-dokimaze če-ou p-et-r-ana-f m-p-čoeis
 状況節化-二^複-吟味する^干 引用節化-何^{定^{単男}-関係節化-する^{名-喜ばす^{代-三^{単男}}}} 属対格-定^{単男}-主^{単男}
 吟味しながら 何が~と 彼を喜ばせるもの 主を

君らは何が主を喜ばせるかを吟味しながら,

f. |> αϋω ἱπρκοι|>νωνει ενε|>ρβηγε ἱπκα|>κε ετεμημνη|>τοϋ καρπος·

auō mpr-koinōnei e-ne-hbēue m-p-kake
 並列接続 禁止-する^{名-仲良くする^干} 向格^{名-定^複-働き^{絶複}} 属対格^{名-定^{単男}-闇^{絶単男}}
 そして 仲良くするな 働きに対して 闇の
ete-mmnt-ou karpos
 関係節化-否定存在^{代-三^複} 実^{干^{単男}}
 ~を持たないもの 実

実を持たない闇の働きと仲睦まじくせず,

g. |> ἡτετη|χιπ|>οοϋ δε ἡτοϋ |> ἡροϋδ·

nt-etn-čpio-ou de ntof n-houo
 接続法^{代-二^複-晒す^{代-三^複}} 小辞 三^複 属対格^{代-より多い^{絶男}}
 君らはそれらを晒せ(直前が命令法であるため) だが 彼ら むしろ

むしろそれらを暴露せよ。」(エフェソの信徒への手紙』 5:8-11 からの引用)

注釈

- a-g. a から g までは、新約聖書中の『エフェソ⁴⁷の信徒への手紙』第5章第8節から第5章11節までからの引用である。引用は *hm-pai on ent-a-f-čoo-s* 「これにおいて彼が言った事」と引用節標識 *ce-*によって導入されている。引用されている『エフェソの信徒への手紙』はパウロが書いたと信じられており、*ent-a-f-čoo-s*の三人称単数男性の *-f-*はパウロを指していると考えられる。なお、引用はこの節で終わってはならず、次節の第2章第2節 a-b. に続いている。
- コプト語サイド方言によるコイナー・ギリシア語新約聖書の古代末期の訳 “5:8 *mpiouoeiš gar etetno nkake pe. tenou de nouoein hmpčoeis. mooše hōs šêre mpouoein. 5:9 erepkarpos gar mpouoein hmppetnanouf nim mntdikaiosunê. mntme. 5:10 etetndokimaze čeou petranaf mpčoeis. 5:11 auô mprkoinôni enehbêue mpkake etemntou karpos. nteŋčpïoou de ntof nhouo.*” (『エフェソの信徒への手紙』第5章第8節-第11節 Ch.Beat. Coptic A⁴⁸ (Thompson 1932))
 - コイナー・ギリシア語新約聖書 “5:8 ἦτε γὰρ ποτε σκότος, νῦν δὲ φῶς ἐν κυρίῳ · ὡς τέχνα φωτὸς περιπατεῖτε 5:9 -ὁ γὰρ καρπὸς τοῦ φωτὸς ἐν πάσῃ ἀγαθωσύνῃ καὶ δικαιοσύνῃ καὶ ἀληθείᾳ- 5:10 δοκιμάζοντες τί ἐστὶν εὐάρεστον τῷ κυρίῳ, 5:11 καὶ μὴ συγκοινωνεῖτε τοῖς ἔργοις τοῖς ἀκάργοις τοῦ σκοτοῦς, μᾶλλον δὲ καὶ ἐλέγγχετε.” (『エフェソの信徒への手紙』第5章第8節-第11節 ネストレ=アーラント第28版)
 - コイナー・ギリシア語新約聖書の日本語訳: 「5:8 あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。5:9 — 光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。— 5:10 何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。5:11 実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。」(『エフェソの信徒への手紙』第5章第8節-第11節 新共同訳)
- b. *pi-ouoeiš* の *pi-*のグロスにある感情的指示は、「感情的指示詞」の略。Layton (2011:48)はこれを “affective demonstrative” と呼んでいる。「感情的指示詞」は、この Layton (2011)の英語における用語の日本語訳である。この「感情的指示詞」の用法については、Layton (2011:48-49)などを参照せよ。

⁴⁷ 原語に忠実な表記ではエフェソスであるが、聖書学ではエペソ/エフェソが用いられている。新共同訳(共同訳聖書実行委員会2001)ではエフェソスはエフェソと表記されており、本稿の聖書中の書物のタイトルは全て新共同訳に基づいている。エフェソス/エフェソ/エペソは、現在のトルコ西部のエフェスにあった小アジアの古代都市である。

⁴⁸ これは、アイルランドのダブリンにあるチェスター・ビーティ図書館(Chester Beatty Library)に所蔵されているコプト語サイド方言訳パウロ書簡の写本を指す所蔵番号である。

第 2 章第 2 節

(3) a. *ne|>τογειρε γαρ |> ἡμοου ἡχι|>ογε, ζενωλοϋ |> νε ε̄ρπκεχο|>ογ̄.*

n-et-ou-eire *gar* *m-mo-ou* *n-čioue* *hen-šlof*
 定^複-関係節化-三^複-する^絶 小辞 属对格^代-三^複 属对格^名-隱密^{絶男} 不定^複-恥すべきこと^{絶男}
 彼らがすること しかし (再呼代名詞)を 隱密に 恥すべきことども
ne *e-r-p-ke-čoo-u*
 繫辞^複 向格-する^名-定^{単男}-他-言う^代-三^複
 それらは~である それらと言う他のことに

「というのは彼らが密かに行っていることは、言うに憚られるほど、恥すべきことだからだ。

b. *ϣαρε|>ζωβ δε nim |> ογων̄ε εβολ |> ετογχιπ̄ο |> ἡμοου ζιτ̄ι|>πογ̄οειν̄.*

šare-hôb *de* *nim* *ouônh* *e-bol* *et-ou-čpio*
 習慣相^名-もの^{絶男} 小辞^干 あらゆる 明らかになる^絶 向格^名-外側^{絶男} 関係節化-三^複-暴露する^絶
 ものは~であるものだ しかし あらゆる 明らかになる 外側へ 彼らは暴露している
m-mo-ou *hi-tm-p-ouoein*
 属对格^名-三^複 の上で^名-手^名-定^{単男}-光^{絶男}
 それらを 光を通して (複前: *hitn-*)

だが、光を通して暴露された全てのものは、明らかにされる。

c. *|> ζωβ` γαρ nim |> ετογον̄ε ε|p.50|βολ ζενογ̄οειν̄ νε.*

hôb *gar* *nim* *et-ouonh* *e-bol* *hen-ouoein ne*
 もの^{絶男} 小辞^干 あらゆる 関係節化-明らかになる^状 向格^名-外側^{絶男} 不定^複-光^{絶男} 繫辞^複
 もの だが あらゆる 明らかになる 外側へ 光 である

「というのは、明らかになる全てのものは光 (複数) だからである。」(『エフェソへの信徒の手紙』 5:8-13 からの引用)

注釈

a.-b. この節は前節にある引用の続きであり, 『エフェソの信徒への手紙』 第 5 章第 12 節-第 14 節から取られている。

- コイナー・ギリシア語新約聖書の古代末期のコプト語サイド方言訳 “5:12 *netoueire gar mmoou nčioue henšlof erpkečooou ne*: 5:13 *šare hôb de nim ouônh ebol etoučpio mmoou hitmpouoein. hôb gar nim etouonh ebol henouoein ne*. 5:14 *etbe paï fčô mmos. če tôoung petnkoṭk nglo oute netmoout tare pek^h(risto)s rouoein erok.*” (翻字および, 分綴と発音区別符号の統一は筆者による, 『エフェソの信徒への手紙』 第 5 章第 12 節-第 14 節 Ch.Beat. Coptic A (Thompson 1932))

- コイナー・ギリシア語新約聖書 5:12 τὰ γὰρ κρυφῆ γινόμενα ὑπὲρ αὐτῶν αἰσχρόν ἐστὶν καὶ λέγειν, 5:13 τὰ δὲ πάντα ἐλεγχόμενα ὑπὸ τοῦ φωτὸς φανεροῦνται, 5:14 πᾶν γὰρ τὸ φανερούμενον φῶς ἐστὶν. διὸ λέγει . ἔγειρε, ὁ καθεὺδων, καὶ ἀνάστα ἐκ τῶν νεκρῶν, καὶ ἐπιφαύσει σοι ὁ Χριστός. (『エフェソの信徒への手紙』第5章第12節-第14節 ネストレ=アーラント第28版)
- コイナー・ギリシア語新約聖書の日本語訳「5:12 彼らがひそかに行っているのは、口にするのも恥ずかしいことなのです。5:13 しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。5:14 明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。『眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。』」(『エフェソの信徒への手紙』第5章第12節-第14節 新共同訳)

第2章第3節

- (4) a. ¶ Ἐτβεπαῖ ρω|ων μαρῆχπιο | ἡνενημῆτ|σοῦ ρραῖ ἡρη|τῆ ἡἡἡμε|εγε τηροῦ | ἡπδιαβολοῦ
| ετῆνοῦχε | ἡμοοῦ εροῦ | ερον · ἡἡἡ|ἡἡἡτατναρτε · | ἡἡἡμοστε ·
etbe-pai hōō-n mar-n-čpio n-ne-n-mnt-soc
~のゆえに^{名-指示^{単男}} 自身も^{代-一^複} 希求法^{代-一^複} 晒す^絶 属対格^{名-所有^{代^複}-一^複} 抽象名詞化^{名女} 愚かさ^男
これゆえ 我ら自身も 晒そう 我らの愚かさを
- hrai nhēt-n mn-m-meeue tēr-ou m-p-diabolos et-f-nouče*
上側 所格^{代-一^複} 共格^{名-定^複} 思考^{絶男} 全体^{代-三^複} 属対格^{名-定^{単男}} 悪魔^{名男} 関係節化-三^{単男} 投げる^絶
上へ 我らの中に 思考と 全ての 悪魔 彼が投げている
- mno-ou e-houn ero-n mn-m-mnt-at-nahte*
属対格^{代-三^複} 向格^{名-内側^{絶男}} 向格^{代-一^複} 共格^{名-定^複} 抽象名詞化^{名女} 否定名詞化-信じる^絶
それら(再呼)を 内へ 我らに 不信心と
- mn-m-moste*
共格^{名-属対格^名} 憎悪^{絶男}
憎悪と

このために、我らが自身の内にある愚かさと、悪魔が我らに投げ入れる、悪魔の全ての思念と不信心と憎悪を晒そうではないか。

- b. ἡθε εωαγτρεῖ|meeγε εππε|θοοῦ εροῦν ενενηρηῦ εντῆρατῆἡἡ |ερηῦ αν επτη|ρῖ·
n-t-he e-ša-u-tre-n-meeue e-p-pet-hoou
属対格^{名-定^{単女}} 様態^{絶女} 状況節化-習慣相^{代-三^複} 使役^{代-定^複} 思う^絶 向格^{名-定^{単男}} 動詞の名詞化^{名男} 悪い^絶
~のように 私たちに思わせられているものだ 悪いことを
- e-houn e-ne-n-erêu e-n-tn-ha-tn-ne-n-erêu an*
向格^{名-内側^{絶男}} 向格^{名-所有^{代^複}-一^複} 相互 状況節化-否定-一^複 下格^{名-手^名} 所有^{代^複}-一^複 相互 否定
内側へ 我ら相互に 我らは共にあらず ~ない

e-p-têr-f

向格^{名-定^{単男}-全体^男-三^{単男}}

その全体に

我らが共におらず, 互いに対して悪を思うようにさせられているものであるからには。

注釈

- b. i *e-ša-u-tre-n-meeue* は非人称三人称複数を用いて意味的に受け身を表している。この受け身の方法はコプト語において一般的である。
 b. ii 複合前置詞 *hatn-*には「~とともに」という共格的な意味もあることに注意。

第2章第4節

- (5) a. $\lambda\gamma\omega \epsilon\eta|\bar{\sigma}\bar{\nu}\alpha\rho\iota\kappa\epsilon \epsilon\bar{\nu}\epsilon|\tau\epsilon\rho\eta\gamma. \lambda\gamma\omega \epsilon|\rho\omega\bar{\nu}' \alpha\eta \bar{\mu}\mu\iota\eta | \bar{\mu}\mu\omega\bar{\nu}'$

auô e-n-cn-arike e-ne-n-erêu auô ero-n
 並列接続 焦点化<sup>代-一^複-見つける^{名-欠点^{絶男}} 向格<sup>名-所有^{代^複-一^複-相互} 並列接続 向格^{代-一^複}
 そして 我らは欠点を見つける 我ら相互に そして 我らに</sup></sup>

an mmin mmo-n
 否定 自身 属对格^{代-一^複}
 ~ない 自身 我らの

そして, 我らが欠点を見つけあっているのは我ら相互にであって, 我ら自身ではない。
 (アントニオスの手紙からの引用 (Garitte 1939:27f))

- b. $\gamma\omega\varsigma |\epsilon\rho\epsilon\pi\epsilon\eta\mu|\omega\epsilon \omega\sigma\omega\bar{\nu}' \epsilon|\gamma\omega\gamma\eta \epsilon\bar{\nu}\epsilon\bar{\nu}\epsilon||\rho\eta\gamma. \lambda\gamma\omega \epsilon\eta|\omega\sigma\omega\bar{\nu}' \alpha\eta \omega\gamma|\beta\epsilon\bar{\nu}\bar{\eta}\alpha\rho\chi\eta \bar{\mu}\bar{\eta}|\bar{\eta}\epsilon\gamma\omega\gamma\iota\alpha. | \omega\gamma\beta\epsilon\bar{\nu}\bar{\eta}\kappa\omega\sigma\mu|\kappa\rho\alpha\tau\omega\rho \bar{\mu}\bar{\eta}\kappa\alpha|\kappa\epsilon. \omega\gamma\beta\epsilon\bar{\nu}\epsilon|\bar{\pi}\bar{\eta}\bar{\eta}\kappa\omega\bar{\nu} \bar{\eta}\tau\bar{\rho}\omega|\bar{\eta}\eta\rho\iota\alpha \epsilon\tau\gamma\alpha\bar{\mu}|\bar{\pi}\eta\eta\gamma\epsilon. \lambda\gamma\omega \omega\gamma|\beta\epsilon\varsigma\eta\omega\gamma \alpha\eta \gamma|\iota\kappa\alpha\rho\bar{\zeta}.$

hôs ere-pe-n-miše šoop e-houn
 ~のように^キ 状況節化<sup>名-所有^{代^男単数-一^複-戦い^{絶男}} 起こる^絶 向格^{名-内側^{絶男}}
 ~のように 我らの戦い 起こる 内側へ</sup>

e-ne-n-erêu auô e-f-šoop an oube-n-ark^hê
 向格<sup>名-所有^{代^複-一^複-相互} 並列接続 状況節化^{代-三^{単男}-起こる^絶} 否定 ~に対して^{名-定^複-支配権^{キ女}}
 我ら相互に そして それ(戦い)が起こる ~ない 支配権に対して</sup>

mn-n-ek^sousia oube-n-kosmokratôr m-p-kake
 共格^{名-定^複-権威^{キ女}} ~に対して^{名-定^複-世の支配者^{キ男}} 属对格^{名-定^{単男}-闇^男}
 権威と 世の支配者に対して 闇の

oube-ne-pn(eumat)ikon n-t-ponêria et-ha-m-pêue
 ~に対して^{名-定^複-心靈^{キ中}} 属对格^{名-定^{単女}-邪悪^{キ女}} 関係節化-下格^{名-定^複-天^{絶複男}}
 心靈たちに対して 邪悪の 諸天の下にいる

auô *oube-snof* *an* *hi-sark^s*
 並列接続 ~に対して^{名-血^{絶男}} 否定 上格^{名-肉^中}
 そして 血に対して ~でない 肉と

我らの戦いが権力，権威，闇の世界の支配者，諸天の下の邪悪な心霊たち，血と肉に対して起こるのではなく，我ら相互に対して我らの戦いが起こっているように。（『エフェソへの信徒の手紙』 6:12 の引用）

注釈

- b. i アントニオスの手紙からの引用である。Garitte (1939:27f) を見よ。
- b. ii 『エフェソの信徒への手紙』 第 6 章第 12 節から，細部を変えながら，ペーサは引用している。
- コイナー・ギリシア語新約聖書のコプト語サイド方言による古代末期の訳 “*čeerepenmiše šoop nan an oube nek^s ousia. oubenkosmokratôr nte peeikake. oubenep-neumatikon ntronêria ethnmpêue:*”（翻字，発音区別符号，および分綴のスタイルの統一は筆者による，『エフェソの信徒への手紙』 第 6 章第 12 節 Ch.Beat. Coptic A (Thompson 1932)）
 - コイナー・ギリシア語新約聖書 “ὅτι οὐκ ἔστιν ἡμῖν ἡ πάλη πρὸς αἷμα καὶ σάρκα ἀλλὰ πρὸς τὰς ἀρχάς, πρὸς τὰς ἐξουσίας, πρὸς τοὺς κοσμοκράτορας τοῦ σκότους τούτου, πρὸς τὰ πνευματικὰ τῆς πονηρίας ἐν τοῖς ἐπουρανίοις.”（『エフェソの信徒への手紙』 第 6 章第 12 節 ネストレ = アーラント 第 28 版）
 - コイナー・ギリシア語新約聖書の日本語訳「わたしたちの戦いは，血肉を相手にするものではなく，支配と権威，暗闇の世界の支配者，天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。」（『エフェソの信徒への手紙』 第 6 章第 12 節 新共同訳）

第 2 章第 5 節

(6) a. $\bar{n}\theta\epsilon$ | \bar{n} | $\epsilon\eta\tau\alpha\pi\alpha\pi\omicron|\sigma\tau\omicron\lambda\omicron\varsigma$ $\chi\omicron\omicron\varsigma$
n-t-he *ent-a-p-apostolos* *čoo-s*
 属対格^{名-定^{単女}}-様態^女 関係節化-過去^{名-定^{単男}}-使徒^{中男} 言う^{代-三^{単女}}
 ~のように 使徒が~した それを言う

使徒が（次のように）言ったように。

b. | $\chi\epsilon\chi\iota$ $\eta\eta\tau\bar{\eta}\bar{n}$ \bar{n} | $\tau\pi\alpha\eta\eta\omicron\pi\lambda\iota\alpha$ | $\bar{\eta}\pi\eta\eta\omicron\gamma\tau\epsilon$
če-či *nê-tn* *n-t-panhoplia* *m-p-noute*
 引用節化-取る^絶 向格^{代-二^複} 属対格^{名-定^{単女}}-鎧兜^{中女} 属対格^{名-定^{単男}}-神^{絶男}
 取れと 君らに 鎧兜を 神の

「神の鎧兜を君ら自身の身に着けよ。」

c. xε|ετεtetnaωβm|βom εαρερατ|τηγτῆ ἡνα|ἔρνῆκοτς | ἡπιαβολος ·

če-e-tetna-š-cmcom

e-ahe-rat-têutn

引用節化-焦点化^{代-二複}:未来-可能- ~する能力がある^絶 向格^名-立たせる^名-脚^名-二複

君らが~ができると

立つこと

nnahrn-n-kots m-p-diabolos

~の前で^名-企み^絶 属対格^名-定^{単男}-悪魔^{ギ男}

企みの前で

悪魔の

君らが悪魔の企みに対して立ち向かうことができるように。

d. xερεπεnmi|ωε ωροπ | na-n an ouβε|cnoq zicarp̄z̄·

če-ere-pe-n-miše

šoop

na-n

an

oube-snof

引用節化-焦点化^名-所有^{単男}-一複-戦い^{絶男} である^絶 向格^代-一複 否定 ~に対して^名-血^{絶男}

我らの戦いは

である

我らに

~でない

血に対して

hi-sark^s

上格^名-肉^{絶女}

肉と

なぜなら,我らの戦いは血と肉に対してではないからである。」「(『エフェソへの信徒の手紙』 6:13 を引用してから 6:11-12 を引用している。)

注釈

a. š-cmcom は, š-だけ, cmcom だけでも可能を表す。

a-c. 前節では『エフェソの信徒への手紙』第6章第12節を引用していたが,当該節では逆行して,『エフェソの信徒への手紙』第6章第11節を引用し,さらに,前節で引用しなかった『エフェソの信徒への手紙』第6章第12節の最初の部分を引用している。

- コイナー・ギリシア語新約聖書の古代末期のコプト語サイド方言訳 “*etbe paï jī nêtn ntpanhoplia mpnoute če etetnešcmcom eaherat têtutn hmpehoou et^hoou. auð eatetček hōb nim ebol ntetntačro.*”(『エフェソの信徒への手紙』第6章第13節 Ch.Beat. Coptic A (Thompson 1932))

- コイナー・ギリシア語新約聖書 “διὰ τοῦτο ἀναλάβετε τὴν πανοπλίαν τοῦ θεοῦ, ἵνα δυνηθῆτε ἀντιστῆναι ἐν τῇ ἡμέρᾳ τῆς πονηρᾶς καὶ ἅπαντα κατεργασάμενοι στῆναι.” (『エフェソの信徒への手紙』第6章第13節 ネストレ=アーラント第28版)

- コイナー・ギリシア語新約聖書の日本語訳「だから, 邪悪な日によく抵抗し, すべてを成し遂げて, しっかりと立つことができるように, 神の武具を身に着けなさい。」(『エフェソの信徒への手紙』第6章第13節 新共同訳)

c. nnahrn-は複合前置詞であり, na-hr-n-は, 与格^名-顔^名-属対格^名-と分解できる。残りの na-

の前の *n-* は属対格^名であるかもしれないが、その場合、属対格と与格の接頭前置詞が連続することになり、不自然である。

- d. 上格 *hi-*^名・*hiô(ô)-*^代は「～と」のような共格的な意味を持つこともある。

第3章第1節

- (7) a. |¶| €τβεπαῖ βε ροεῖς ἀγῶ ἡτῆν|p.51|ἀμαρτε ἡππε|τῆνανουγ·

etbe-pai *ce* *roeis* *auô* *n-tn-amahte*
 ~のゆえに^{名-指示_絶単男} 小辞 警戒する^絶 並列接続 接続法^{代-一_複}-抱く^絶
 これゆえ それゆえ 警戒せよ そして 我らは抱け

m-p-pet-nanou-f

属対格^{名-定_{単男}}-動詞の名詞化<sup>男-良い(準動)^{代-三_{単男}}
 善を</sup>

だから、それゆえ、我らは警戒し、善を抱くようにしようではないか。

- b. |ε|βολ χεογῆ|ζαζ' €γζατῆ|νεγερηγ ἔμ|πσωμα· €γ|ογηνγ δε εβολ |ἡνεγερηγ | ἔμπερητ·
 ἀγῶ | ταγαπη·

e-bol *če-oun-hah* *e-u-ha-tn-ne-u-erêu*
 向格^{名-外側_男} 引用節化-存在^{名-多い_絶} 状況節化-三_複-下格^名-手^名-所有^{複-三_複}-相互
 なぜなら (*ebol če-*) 多いものが存在する 我ら相互にしながら

hm-p-sôma *e-u-ouêu* *de* *e-bol* *n-ne-u-erêu*
 所格^{名-定_{単男}}-体^中 焦点化^{代-三_複}-遠い^状 小辞^キ 向格^{名-外側_{絶男}} 属対格^名-所有^{複-三_複}-相互
 体において それらは遠く だが 離れて 彼ら同士で

hm-p-hêt *auô* *t-agapê*
 所格^{名-定_{単男}}-心^{絶男} そして 定^{単女}-愛^{キ女}
 心において そして 愛

なぜなら、身体において互いに一緒にいながら、心と愛において互いから離れている者が多いからである。

- c. |ογῆζαζ δε ον | €γζατῆ|νεγερηγ αν ἔμ|πσωμα· €γ|ζατῆ|νεγερηγ ἡναγ νιμ |
 ἔνταγαπη ἡ|πεχ̄ς ἡντα|γαπη ἡπεπῆα | ἀγῶ πογωω | ἡῖς :

oun-hah *de* *on* *e-u-ha-tn-ne-u-erêu* *an*
 存在^{名-多い_絶} 小辞^キ 小辞 状況節化-三_複-下格^名-手^名-所有^{複-三_複}-相互 否定
 多いものがある だが また 彼らは彼ら相互に一緒にいる ~でない

hm-p-sôma *e-u-ha-tn-ne-u-erêu* *n-nau* *nim*
 所格^{名-定_{単男}}-体^{キ中} 状況節化-三_代-下格^名-手^名-所有^{複-三_複}-相互 属対格^名-時^男 全ての
 体において 彼らは相互に一緒にいる 時で 全ての

<i>hn-t-agapê</i>	<i>m-pe-k^(h)risto)s</i>	<i>mn-t-agapê</i>	<i>m-pe-pn(eum)a</i>	<i>auô</i>
所格 ^名 -定 ^{単女} -愛 ^{キ女}	属対格 ^名 -定 ^{単男} -キリスト ^{キ男}	共格 ^名 -定 ^{単女} -愛 ^{キ女}	属対格 ^名 -定 ^{単男} -霊 ^{キ中}	並列接続
愛において	キリストの	愛と	霊の	そして
<i>p-ouôš</i>	<i>n-i(êsou)s</i>			
定 ^{単男} -思慕 ^男	属対格 ^名 -イエス ^{キ男}			
思慕の	イエスの			

だが、さらには、身体に置いて互いに一緒にいないが、キリストの愛、および、霊の愛（アガペー）とイエスへの思慕（ウォーシュ）とに置いて常に互いに一緒にいる者たちがたくさんいる。

注釈

- a. 名詞化の *pet-* は通時的には単数男性定冠詞 *p³* と関係詞 *nti* が一つの形態素となり、さらに定冠詞の意味が失われ、さらにその前に定冠詞や不定冠詞が付く名詞化の形態素となったものであると考えられる。Layton (2011, 2004, 2000:§110) の文法書はあくまで通時的な変化は視野に入れない共時的構造主義の文法であり、彼はこの *pet-* を “invariable *pet-*” と呼んでいる。Shisha-Halevy (1986:§5.2.3.1) も共時的構造主義言語学的な視点から Layton (2011) と同じ立場を取っている。この *pet-* は生産性が低く、この後の動詞は、一般的に、状態や性質を表す限られた動詞類、例えば、*nanou-* 「良い」などの準動詞や、*ouaab* 「聖なる」などの状態形の動詞が来る。
- b. *ha-tn-* (下格^名-手^名-) は複合前置詞で、「～の手の下で」「～の側で」「～と」などを意味する。
- c. *ouôš* は「欲する」あるいは「愛する」といった意味の動詞、および、「欲」や「愛」を意味する男性名詞である。ここでは、「欲する」と「愛」という意味を両方表現し、また、前出したキリスト教的な愛を指すアガペーと区別するため、「思慕」と訳した。これに対し、Kuhn (1956:1) は “good-pleasure” と訳している。

第3章第2節

- (8) a. |¶ Ñ̄τωτῆ̄ δε νε|ςνηϋ̄ ραρε̄ϋ̄
ntôtn de ne-snêu hareh
 二複 小辞 定複-兄弟複 警戒する^絶
 君ら だが 兄弟たち 警戒せよ
 だが、君ら兄弟たちよ、警戒したまえ。

b. | αΥΩ ΜΟΥΝ` Ε|ΒΟΛ Ξ̄ΝΝΕΝ|ΤΑΤ̄Ν̄ΤΣΑΒΟ | ΕΡΟΥΥ ·

auô moun e-bol hn-n-ent-a-tn-tsabo ero-ou

並列接続 続ける^絶 向格^名-外側^{絶男} in^名-定^複-関係節化-過去-二^複-教える^絶 向格^代-三^複

そして 続けよ 外側へ 君らが教えたことを 彼らに

そして君らが彼らに教えたことを続けたまえ。

c. αΥΩ | ΟῩΝ̄ΖΑΖ ΝΑΧΙ||ΣΒΩ̄ ΑΥΩ Ν̄ΣΕ|†ΖΗΥ ΕΒΟΛ Ν̄|ΜΩΤ̄Ν̄·

auô oun-hah na-çi-sbô auô n-se-t̄-hêu

並列接続 存在^名-多い^絶 未来-受ける^名-教え^{絶女} 並列接続 接続^代-三^複-取る^名-利益^{絶男}

そして 多いものが~ある 学ぶ(未来) そして 彼らは利益を取る

e-bol mmô-tn

向格^名-外側^{絶男} 属对格^代-二^複

外側に 君らから

そうすれば,多くの者が学び,君らから利益を得るだろう。

d. ḿ̄θ̄ε | ΕΝΤΑΧ̄Χ̄ΟΟΣ | Χ̄ΕΜΑΡΟΥΝΑΥ | ΕΝΕΤ̄Ν̄ΖΒΗΥΕ | ΕΤΝΑΝΟΥΟΥ | Ν̄ΣΕ†ΕΟΥΥ | ḿ̄ΠΕΤ̄Ν̄ΕΙΩΤ
| ΕΤ̄Ζ̄Ν̄Π̄ΗΥΕ ·

n-t-he ent-a-f-çoo-s ç̄e-mar-ou-nau

属对格^名-定^{単女}-様態^{絶女} 関係節化-過去^代-三^{単男}-言う^代-三^{単女} 引用節化-希求法^代-三^複-見る^絶

~のように それ(再呼)を彼らが言った(関係節) 彼らが見るように

e-ne-tn-hbêue et-nanou-ou n-se-t̄-εοου

向格^名-所有^{代複}-二^複-業^{複絶} 関係節化-良い(準動)^代-三^複 接続法^代-三^複-与える^名-栄光^{絶男}

君らの所業に 良い(関係節) 栄光を彼らが与えるように

m-pe-tn-eiôt et-hn-m-pêue

与格^名/属对格^名-所有^{代単男}-二^複-父^{絶男} 関係節化-所格^名-定^複-天^{絶複}

君らの父に 諸天にいる(関係節)

「彼らが君らの善き所業を見,諸天にます君らの父を彼らが讃えるようにあらんことを。」と言われたように。(『マタイによる福音書』 5:16)

注釈

c. *ebol n-名*・*ebol mmo-代*は、「~から」といった奪格的な意味になる。

d. i この箇所は新約聖書中の『マタイによる福音書』第5章第16節から直接引用している。この箇所はイエスの「山上の垂訓」と呼ばれる説教の一部に当たる。

- コイナー・ギリシア語新約聖書のコプト語サイド方言による古代末期の訳 “*tai te t̄e marefrouoein ncipetnouoein mpemto ebol nnerôme çekas euenau enetnhbêue et-nanouou nse†eouou mpetneiôt ethnmpêue.*” (『マタイによる福音書』第5章第16節 M569 Pérez (1984))
- コイナー・ギリシア語新約聖書 “οὕτως λαμψάτω τὸ φῶς ὑμῶν ἔμπροσθεν τῶν

ἀνθρώπων, ὅπως ἴδωσιν ὑμῶν τὰ καλὰ ἔργα καὶ δοξάσωσιν τὸν πατέρα ὑμῶν τὸν ἐν τοῖς οὐρανοῖς.” (『マタイによる福音書』 第 5 章第 16 節 ネストレ = アーラント 第 28 版)

- コイナー・ギリシア語新約聖書の日本語訳「そのように，あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が，あなたがたの立派な行いを見て，あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」(『マタイによる福音書』 第 5 章第 16 節 新共同訳)

- d. ii *n-t^he* は直訳すると「(その) 状態で」という意味だが，そのあとに関係節もしくは属対格句を伴い，日本語では「~のように」の意味となる。
- d. iii 接続法を有する節の法は前の節のものと同じになる。ここでは，*n-se-tⁱ-eouu* は，直前の *če-mar-ou-nau* で始まる節と同じ希求法で解釈される。

第 3 章第 3 節

- (9) a. *ñœ gar enta|tetnoœr|tÿtñ ñca|netoœab tÿ|poœ ðñnetñ|praœeis :*

n-t-he gar ent-a-tetn-oueh-tÿutn nsa-n-et-ouaab

属対格^名-定^{単女}-様態^絶 小辞^キ 関係節化-過去^絶-二^複-置く^名-二^複 ~のあとで^名-定^複-関係節化-聖なる^状
~のように だが 君らが置く(関係節) 聖なるものたちの後で

tÿr-ou hn-ne-tñ-prak^seis

全体^代-三^複 所格^名-所有^代-二^複-行動^{キ女}

全て あなた方の行動において

君らは君らの行動において聖人たちに従うように。

- b. *ñœ |ñ entaœœos | œñtok œ | œkoœœk ñca|taœbŵ. pa|smot³ patœœ | taœistis³ | tañntœœrœœ|œnt³ taœœaœ|pñ taœœpo|monñ naœi|œœmos naœisœ³*

n-t-he ent-a-f-œoo-s œ-ntok de

属対格^名-定^{単女}-様態^{絶女} 関係節化-過去^名-三^{単男}-言う^代-三^{単女} 引用節化-二^{単男} 小辞^キ
のように 彼が言う所の 君が~と だが

a-k-ouah-k n-sa-ta-sbô pa-smot

過去^代-二^{単男}-置く^代-二^{単男} 属対格^名-側^名-所有^{単女}-一^単-教え^{絶女} 所有^{単男}-一^単-範例^{絶男女}
あなたがあなたを置いた 私の教えの後で 私の性格

pa-tôš ta-pistis ta-mnt-harš-hêt

所有^{単男}-一^単-宿命^{絶男} 所有^{単女}-一^単-信仰^{キ女} 所有^{単女}-一^単-抽象名詞化^{名女}-重い^名-心^男
私の宿命 私の信仰 私の長き苦しみ

ta-agapê ta-hupomonê na-diôœmos na-hise

所有^{単女}-一^単-愛^{キ女} 所有^{単女}-一^単-忍耐^{キ女} 所有^複-一^単-迫害^{キ男} 所有^複-一^単-苦しみ^{絶男}
私の愛 私の忍耐 私の迫害 私の苦しみ

「だが，君は私の教え，私の範例，私の宿命，私の信実，私の長きに渡る苦しみ，私の愛，私の忍耐，私の迫害に従った。」と言われたように，(『テモテへの手紙・第二』

3:10-11)

c. οὐεζ|p.52|τηγτ̄ν̄ ον̄ ἢ|σωοῡ ε̄μπεζα|ρεζ` ενετ̄ν̄χι|σε̄ νητ̄ν̄ ·

oueh-têutn on n-sô-ou hm-p-hareh e-ne-tn-hise

置く^{名-二複} 小辞 属对格^{名-側代-三複} 所格^{名-定^{単男}-守る^{絶男}} 向格^{名-所有^{複-二複}-苦しみ^{絶男}}
 従う さらに 彼らのあとで 守りにおいて 君らの苦しみのために

nê-tn

与格^{代-二複}

君らに対する

君らに対する迫害に注意しながら，さらに，それらに従え。

d. |¶| Νετεογ̄ν̄ταγ̄ | γαρ̄ ἡμαγ̄ ἢ|τ̄μ̄ν̄τρ̄μᾱδ̄ | νατ̄τακο̄ ε̄μ̄|πεχ̄ς. ἦτοογ̄ | ον̄` νετηπ̄
 ε|ροεις̄ ερος̄ | ναγ̄

n-ete-ounta-u gar m-mau n-t-mnt-rm-mao

定^複-関係節化-存在^{代-三複} 小辞^干 属对格^{名-その場所^{絶男}} 属对格^{名-定^{単女}-抽象名詞化^{名女-人^{男名}-偉大な}}
 彼ら(再呼)が持つもの だが そこで 富を

n-at-tako hm-pe-k^h(risto)s ntoou on

属对格^{名-否定名詞化^{名-壊す^絶}} 所格^{名-定^{単男}-キリスト^{干男}} 二複 小辞
 破壊不可能な キリストにおいて 君ら または

n-et-êp e-roeis ero-s na-u

定^複-関係節化-数える / 尊ぶ^状 向格^{名-警戒する^絶} 向格^{代-三^{単女}} 与格^{代-三複}
 尊ぶものたち 警戒するために それに 彼らに(再帰)

というのは，キリストの内にある破壊不可能な富を持つ者である君らは，また，自分自身のためにそれを警戒することを尊ぶ者たちであるからである。

注釈

a. i この箇所は以下の新約聖書中の『テモテへの手紙二』の主に第3章第10節から引用している。

- コイナー・ギリシア語新約聖書の，コプト語サイド方言による古代末期の翻訳 “*ntok de a-k-ouahk nsa-ta-cbô. pa-cmot. pa-tôš. ta-pistis. ta-mnt-hars-hêt. ta-agapê. ta-hupomonê.*” (『テモテへの手紙二』第3章第10節 (Thompson 1932) , 翻字・分綴・発音区別符号のスタイルの統一は筆者による。)
- Σὺ δὲ παρηκολούθησάς μου τῆ διδασκαλίᾳ, τῆ ἀγωγῆ, τῆ προθέσει, τῆ πίστει, τῆ μακροθυμίᾳ, τῆ ἀγάπῃ, τῆ ὑπομονῆ, (『テモテへの手紙二』第3章第10節 ネストレ=アーラント第28版)
- 第3章第10節「3:10 しかしあなたは，わたしの教え，行動，意図，信仰，寛容，愛，忍耐に倣い，」(『テモテへの手紙二』第3章第10節 新共同訳)

a. ii *oueh-têutn* 二人称複数の接尾代名詞には2つの形がある。1つ目は，*-tn* であり，こちら

は、他の接尾代名詞と同じくアクセントを持たず、その前の動詞は代名詞接続形を取る。2つ目は、特別な形-*têutn* であり、こちらはそれ自体アクセントをもち、その直前の動詞は名詞接続形を取る。

- c. *oueh*-^名「従う」は複合前置詞 *nsô*-^代「～のあとで」と組み合わせさせて「～に従う」という意味になる。
- d. この *n-at-tako* の *n*-はリンカーとして機能している。

第4章第1節

- (10) a. *ewxε|nετεογñταγ | m̄maγ n̄oy|xpημα · oy|noγb̄ m̄noγ|zατ̄ m̄nzεn|zγπαρχοντα · | φαγροεις xε|ññεñλhcthc | qitoy n̄xioγe |*
ešče-n-ete-ounta-u m-mau n-ou-k^hrêma
 もし-定^複-関係節化-存在^代-三^複 属対格^名-その場所^絶 属対格^名-不定^単-財産^{干中}
 もし、持つものたちが そこで 財産を
ou-noub mn-ou-hat mn-hen-hupark^honta ša-u-roeis
 不定^単-金^{絶男} 共格^名-不定^単-銀^{絶男} 共格^名-不定^複-所有物^{干中} 習慣相^代-三^複-警戒する^絶
 金 銀と 所有物と 彼らは警戒するものだ
če-nne-n-lêstês fit-ou n-čioue
 引用節化-否定希求法^名-定^複-盗人^{干男} take^代-三^複 属対格^名-盗み^{絶男}
 泥棒が～しない(か)と それらを取る 盗みにおいて
 財産、つまり、金・銀・所有物を持つ者は、盗人がそれらを盗まないか警戒するものであるなら、
- b. *eie wγe epō | n̄oyhr epoleic xεññε|pχaxε qi n̄|xioγe m̄pen|petnanoγq | εt̄ñeipε m̄|moq :: nen|wλhñ · m̄ñ|mennhcteia · | m̄ñpen|t̄bbo · | aγw tenzγ|pomonn̄*
eie šše ero-n n-ouêr e-roeis
 帰結節標識 適切である^絶 向格^代-一^複 属対格^名-いくら^絶 向格^名-警戒する^絶
 そうしたら(帰結節) 適切である 我らに いくらのを 警戒するために
če-nne-p-čače fi n-čioue
 引用節化-否定希求法^名-定^{単男}-敵^絶 取る^絶 属対格^名-盗み^{絶男}
 敵が～しない(か)と 取る 盗みにおいて
m-pe-n-p-et-nanou-f et-n-eire mmo-f
 属対格^名-所有^{代単男}-一^複-定^{単男}-関係節化-良い(準動)-三^{単男} 関係節化-一^複-する^絶 属対格^代-三^{単男}
 我らの良きものを 我らがする それを
ne-n-šlêl mn-ne-n-nêsteia mn-pe-n-tbbo auô
 所有^{代複}-一^複-祈る^絶 共格^名-所有^{代複}-一^複-断食^{干女} 共格^名-所有^{代単男}-一^複-純潔^{絶男} 並列接続
 我らの祈り 我らの断食と 我らの純潔 そして

te-n-hupomonê

所有^{代単女}-一^複-節操^{キ女}

我らの節操

我らが行う良きもの、つまり、我らの祈り、我らの断食、我らの純潔と我らの節操が敵に盗まれないか用心することがどれほど我らにとって適しているか。

第 4 章第 2 節

(11) a. |ñ ñπωωω | γαρ αν ñου|ωτ` πε πχι|ογε ñουγδτ | μñουνουβ ·

m-pi-sôš

gar

an

n-ouôt

pe

p-čioue

否定-感情的指示^{単男}-同一性^{絶男} 小辞^キ

否定

属対格^名-単一な 繫辞^{単男}

定^{単男}-盗み^{絶男}

あの同一性は ~ ない

というのは ~ ない 単一な

それは ~ である (その) 盗み

n-ou-hat

mn-ou-noub

属対格^名-不定^単-銀^{絶男} 共格^名-不定^単-金^{絶男}

銀の

金と

というのも、それは、銀と金を盗むのとは同じではないからである。

b. | αλλα ñœ ε|τερετμñτ|παρενος | αγω τμñτ|μονοχος τα|ñηγ ñμος· | ñτεϊρε οñ
| ρεπογδaze | εφιτογ ñχι|ογε ñσιπχα|ξε·

alla

n-t-he

etere-t-mnt-part^henos

auô

逆接接続^キ

所格^名-定^{単男}-様態^{絶女}

関係節化-定^{単女}-抽象名詞化^{名女}-処女^{キ女}

並列接続

しかし

~ のように

貞潔が ~ (関係節)

そして

t-mnt-monok^hos

taïêu

mmo-s

n-tei-he

on

定^{単女}-抽象名詞化^{名女}-修道士^{キ男}

貴重^だ^状

属対格^代-三^{単女}

属対格^名-指示^{単女}-様態^{絶女}

小辞

修道

大切である

それを

このように

また

f-spoudaze

e-fit-ou

n-čioue

nci-p-čače

三^{単男}-熱心である^キ

向格^名-取る^代-三^複

属対格^名-盗む^絶

主格^名-定^{単男}-敵^{絶男}

彼は熱心である

それらを取るために

盗みにおいて

敵は

しかし、貞潔と修道が大切であるから、それだから、敵はそれらを盗みたがる。

c. πεñταϑ|ξπο δε ñαϑ | ñρεñμαρκα|ριτñς. ñ ου|νουβ. ϑαϑρ̄|οϑωñ ñροεις·

p-ent-a-f-čpo

de

na-f

n-hen-markaritàs

ê

定^{単男}-関係節化-過去^代-三^{単男}-獲得する^絶

小辞^キ

向格^代-三^{単男}

属対格^名-不定^複-真珠^{キ女}

選択^キ

彼(再呼)が獲得した(関係節)

だが

彼(再帰)に 真珠を

または

ou-noub

ša-f-r-oušê

n-roeis

不定^単-金^{絶男}

習慣相^代-三^{単男}-する^名-夜^{絶女}

属対格^名-警戒^{絶男}

金

夜を過ごすものだ

警戒して

そして、自らの為に真珠または金を獲得する者、このような者が警戒して夜を過ごす

ものである。

- d. εἴθε|p.53|ἄραρεπχαχε| ῥοῦνη ἦροεις | εἴθεοῦπο|νηρια· εἴε|φναροεις ἦ|οῦνη ἦσιπε|τεοῦἦτῶ
 νε|χρημα· χεῖ|νεγεπιβοῦ|λεγε εροοῦ·
ešče-šare-p-čače *r-oušê* *n-roeis* *etbe-ou-ponêria*
 もし-習慣相^名-定^{単男}-敵^{絶男} する^名-夜^絶 属対格^名-警戒する^絶 ~に関して^名-不定^単-邪悪^絶
 もし敵が~する習慣であるなら 夜を過ごす 警戒して 邪悪のために
eie-f-na-roeis *n-ouêr* *nci-p-ete-ount-f* *ne-k^hrêma*
 帰結節-三^{単男}-未来-警戒する^絶 属対格^名-いくつ 主格^名-定^{単男}-関係節化-存在^代-三^{単男} 定^複-財産^中
 彼は警戒するだろう いくつを 持っているものが 財産を
če-nne-u-epibouleue *ero-ou*
 引用節化-否定希求法^名-三^複-企む^中 向格^代-三^複
 彼らが企まないようにと それらに

もし、敵が悪のために警戒して夜を過ごすならば、財産の所有者は、それらを彼らが企まないようにとどれほど警戒することであろうか。

第 5 章第 1 節

- (12) a. |ἢ μαρῆρπmeeεε| ἦνεττανεν|ειωτ^ν· χοοῦ
mar-n-r-p-meeue *n-n-ent-a-ne-n-eiôt*
 希求法^名-一^複-する^名-定^{単男}-思考^{絶男} 属対格^名-定^複-関係節化-過去^名-所有^複-一^複-父^複
 我らは思い出そうではないか 我らの父祖たちが~したこと
çoo-u
 言う^代-三^複
 それら(再呼)を言う
 我らの父祖たちが言ったことを思い出そうではないか。
- b. |χερενσνη| καταπενβι|ος, εγνηστεεε
če-hen-snêu *kata-pe-n-bios* *e-u-nêsteue*
 引用節化-定^複-兄弟^複 ~に従って^中-所有^{単男}-一^複-命^{中男} 状況節化-三^複-断食する^中
 兄弟が~と 我らの生に従い 彼らは断食し
- 「兄弟たちは、我らの生き方にしたがって、断食をし、
- c. |εγῶληλ δε| ον· εγο ἦοῦ|ῶἦ ἦροεις·
e-u-šlêl *de* *on* *e-u-o* *n-oušê*
 状況節化-三^複-祈る^絶 小辞^中 小辞 状況節化-三^複-する/ある^状 属対格^名-夜^女
 彼らは祈り だが また しながら 夜を
nroeis
 属対格^名-警戒する^{絶男}
 警戒の

だが、また、彼らは祈り、不寝番をした。

d. |εγχιβολ δε |ον·εγμιωε·|εγ†των·

e-u-čī-col *de* *on* *e-u-miše*
 状況節化-三複-取る名-嘘^{絶男女} 小辞^干 小辞 状況節化-三複-喧嘩をする^絶
 彼らが嘘をつき だが また 彼らは喧嘩をし

e-u-tⁱ-tôn
 状況節化-三複-与える名-口論^男
 彼らは口論し

だが、また、彼らは嘘もつき、喧嘩もし、口論もし、

e. |εγκρ̄μ̄ρ̄μ̄ |αγω εγκατα|λαλει·

e-u-kr̄m̄r̄m̄ *auô* *e-u-katalalei*
 状況節化-三複-ぶつぶつ不平を言う^絶 並列接続 状況節化-三複-悪口を言う^干
 彼らはぶつぶつ不平を言って そして 彼らは悪口を言って

彼らはぶつぶつ不平を言って、悪口を言い、

f. εγ|μοστε·εγ|μοοφε ξ̄ν|ογζητ̄ ḿ̄mn̄t̄||ḿ̄mmo·εγχω|ξ̄μ̄ ḿ̄μοογ̄

e-u-moste *e-u-mooše* *hn-ou-hêt* *m-mnt-šmmo*
 状況節化-三複-憎む^絶 状況節化-三複-歩く^絶 所格名-不定単-心^{絶男} 属对格名-抽象名詞化^{名女}-異邦人^{絶男}
 彼らは憎み 彼らは歩き 心において 無関心の

e-u-čôhm *mmo-ou*
 状況節化-三複-汚す^絶 属对格代-三複
 彼らは汚し 彼ら(自身)を

彼らは憎み、無関心の道を歩み、彼ら自身を汚し、

g. |αγω εγο̄ ḿ̄κροφ. |εγειρε̄ ḿ̄ζωβ |nim εγροογ̄

auô *e-u-o* *n-krof* *e-u-eire*
 順接続詞 状況節化-三複-する/ある^状 属对格名-狡猾だ^絶 状況節化-三複-する^絶
 そして 彼らはある 狡猾で 彼らはなし

n-hôb *nim* *e-f-hoou*
 属对格名-働き・こと^{絶男} あらゆる 状況節化-三単男-悪い^状
 ことを あらゆる それが悪い状態で

彼らは狡猾で、全ての悪事をなす。

h. |naī ḿ̄teimine |εγḿ̄ρισε̄ ε|πχινχη·

naī *n-tei-mine* *e-u-šp-hise* *e-p-činčê*
 指示^{絶複} 属对格名-指示^{女単}-態度^絶 状況節化-三複-受け取る名-苦惱^絶 向格名-定単男-虚しさ^{絶男}
 これら この態度で 彼らは煩い 虚しさのために

これらの者どもは虚しく煩うといった態度であり、

- i. αγω | ἡμῶν λααυ ν|νοφρε ναφω|πε ναυ·
auô mmn-laau n-nofre na-šôpe na-u
 順接接続詞 否定存在^名-いくらか 属对格^名-良い^{絶女} 未来-起こる^絶 向格^代-三^複
 そして 何一つない 良いものの 起こる(未来) 彼らに
 彼らには良き事が一つも起こらない。
- j. επι|χῆν ναυ ον τε | τευζηπομο|νή·
e-p-čincê na-u on te te-u-hupomonê
 状況節化-定^{単男}-虚しさ^{絶男} 向格^代-三^複 小辞 繫辞^{単女} 所有^代単女-三^複-節操^絶
 虚しさが~で 彼らにとって また/さらには それは~である 彼らの節操
 更には, 彼らの節操は彼らにとって虚しい。

注釈

- a. *r-p-meeue* は「その思考をなす」という直訳だが, 「思い出す」という意味。
 d. *col* 「嘘」は男性の場合もあれば, 女性の場合もあるが, 女性の場合は稀である (Crum 1999:806)。

第5章第2節

- (13) a. καταπε|ταχυοοφ δε|ουκνααυ εφ|μεζ αν πε, ε|τρεφ̄ρνοειτ.
kata-p-ent-a-u-čoo-f če-ou-knaau
 ~によれば/ように^名-定^{単男}-関係節化-過去^代-三^複-言う^代-三^{単男} 引用節化-不定^単-束^{絶男}
 言われたことのように (穀物の)束が~と
e-f-meh an pe e-tre-f-r-noeit
 状況節化-三^{単男}-満たす^絶 否定 繫辞^{単男} 向格^名-使役^代-三^{単男}-する^名-糧^{絶男}
 それが満ちて ない それは~である それに糧をなさせるために
 「それは, 糧をなすには満たない(穀物の)束である」と言われたように。(『ホセア書』8:7への引喩)
- b. | εἰπαῖ ον εν|ταχυοοφ δε|χο ἡρενοσογ· | ἡτεῖνω̄ς | ἡρενω̄οντε· | νεγκληρος | ἡσενα|ζηγ | ναυ αν·
hm-pai on ent-a-u-čoo-s če-čo n-hen-souo
 in^名-指示^{単男} 小辞 関係節化-過去^代-三^複-言う^代-三^{単女} 引用節化-時^く 属对格^名-不定^複-麦^{絶男}
 これにおいて また 言われていること 時けと 麦を
n-tetn-ôhs n-hen-šonte ne-u-klêros n-se-na-ti-hêu
 接続^代-二^複-刈る^絶 属对格^名-不定^複-荊^{絶女} 所有^代複-三^複-畑^{単男} 否定-三^複-未来-与える^名-利益^{絶男}
 君らは蒨りとれ 荊を 彼らの畑 彼らが益さないだろう

na-u *an*
 向格^{代-三複} 否定
 彼らに ない

これにおいて言われていることがある。「小麦を撒き、イバラを刈れ。彼らの畑は彼らを益さない」(『エレミヤ書』 12:13 からの引用)

注釈

a. 次の『ホセア書』第8章第7節への引喩である。

- この部分は現存するエディション (Ciasca 1889) では、欠損している。
- コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書 “7 ὅτι ἀνεμόφθορα ἔσπειραν καὶ ἡ καταστροφή αὐτῶν ἐκδέξεται αὐτά δράγμα οὐκ ἔχον ἰσχὺν τοῦ ποιῆσαι ἄλευρον ἐὰν δὲ καὶ ποιήσῃ ἀλλότριοι καταφάγονται αὐτό” (『ホセア書』第8章第7節 Rahlfs and Hanhart (2014))
- “Because they sowed things blasted by the wind, their destruction shall also await them— a sheaf unable to produce meal, and even if it should do so, foreigners will devour it.” (『ホセア書』第8章第7節 8:7 NETS)

b. i 接続法の時制・相・法は直前の節と同じとなる。*n-tetn-ôhs* の直前の節は *če-čo* (引用節化-時^{く絶})「蒔けと」であり、法は命令法であるため、*n-tetn-ôhs* も命令法に解釈される。

b. ii 『エレミヤ書』12章13節からの引用を含んでいる。

- コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書の古代末期のコプト語サイド方言訳 “*čō nhensouō · ntetnôhs nhenšonte · neuklêros nsenatⁱ hêu nau an · čī šipe ebol hm petnšoušou · mn petnnočnec mpemto ebol mpčoeīs ·*” (『エレミヤ書』第12章第13節 Feder (2002:129) 翻字, 発音区別符号, 分綴のスタイルの統一は筆者による。)
- コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書 “σπείρατε πυρούς καὶ ἀκάνθιας θερίσατε οἱ κληροὶ αὐτῶν οὐκ ὠφελήσουσιν αὐτοὺς αἰσχύνθητε ἀπὸ καυχήσεως ὑμῶν ἀπὸ ὀνειδισμοῦ ἔναντι κυρίου”(『エレミヤ書』第12章第13節 Rahlfs and Hanhart (2014))
- コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書の英訳 Jeremiah 12:13 “Sow wheat, and reap thorns. Their farms will not profit them. Be ashamed of your boasting, of reproaching before the Lord—” (『エレミヤ書』第12章第13節 NETS)

第 5 章第 3 節

- (14) a. |¶ ετβεπαϊ σε ροεις ἡπῆρκ|p.54|πχαχε ετακο | ἡπενπετ|νανουγ ετῆ|ειρε ἡμοι.
etbe-pai ce roeis mpr-ka-p-čače e-tako
 ~ のため^{名-指示_{絶単男}} 小辞 警戒する^絶 禁止-置く^{名-定_{単男-敵_{絶男}}} 向格^{名-破壊する_絶}
 このため また 警戒せよ 敵に~させるな 破壊することを
m-pe-n-pet-nanou-f et-n-eire mmo-f
 属对格^{名-所有_{代単-一_複-動詞名詞化_{名男}-良い(準動)_{代-三_{単男}}}} 関係節化-定^{複-する_絶} 属对格^{代-三_{単男}}
 我らの善を 我らが行う(関係節) それ(再呼)を

また, このため, 警戒し, 敵に我らが行う我らの善を破壊させるな。

- b. |αλλα ἡνῆραρεζ|nim ῆραρεζ` ε|πενῆητ` ε|βολ ἡνμεεγε|nim ερχαζῆμ|ἡτεπδιαβολος`
alla hn-hareh nim hareh e-pe-n-hêt e-bol
 逆接続^干 所格^{名-守備_{絶男}} あらゆる 守備する^絶 向格^{名-所有_{代単男-一_複-心_{絶男}}} 向格^{名-外側_{絶男}}
 しかし 守備において あらゆる 守れ 我らの心に 離れて

hn-meeue nim e-f-čahm nte-p-diabolos
 所格^{名-思い_絶} あらゆる 状況節化-三^{複-汚れる_状} 属格^{名-定_{単男}-悪魔_{干男}}
 思いにおいて あらゆる それが汚れている(状況節) 悪魔の

むしろ, あらゆる防御で, 我らの心を悪魔の全ての汚れた思念から防御せよ。

- c. χεκας |εннаῤῥπφα|ἡσωτῆμ επαῖ|ἡνογτωτ|ἡηητ`
čekas e-n-na-r-mpša n-sôtm e-pai
 ~ するために 状況節化-一<sup>複-未来-する_{名-価値_{絶男}} 属对格^{名-聞く_絶} 向格^{名-指示_{単男}}
 ~ にするために 我らは相応しい 聞くことを これに</sup>

hn-ou-tôt n-hêt
 所格^{名-不定_単-結合_{絶男}} 属对格^{名-心_{絶男}}
 結合において 心の

我らが心の満足のうちにこれを聴くのに相応しくなるために。

- d. χεἠσε|ναῤῥωβ αν|ἡῤῥῆμῆ χῆ|ἡπῆναγ` α|λα εῤῥαῤῥωβ |ἡπχοεις |πεῤῥογτε`
če-n-se-na-r-hôb an n-šmmo činm-pi-nau
 引用節化-否定-三<sup>複-未来-する_{名-働き_{絶男}} 否定 向格^{名-異邦人_{絶男}} ~ から^{名-感情的指示_{単男-時_{絶男}}}
 彼らが働きをしないと ない 異邦人に あの時から
alla e-u-na-r-hôb m-p-čoeis pe-u-noute
 逆接続^干 焦点化<sup>代-三_複-未来-する_{名-働き_{絶男}} 属对格^{代-定_{単男}-主_{絶男}} 所有^{代_{単男}-三_複-神_{絶男}}
 しかし 彼らが働きをしている 主の 彼らの神</sup></sup>

「彼らは, 異邦人のためにこの時から, 働かない。しかし, 彼らは主, 彼らの神のために働くべきだ。」(『エレミヤ書』 37:8-9)

注釈

- c. *tôt n-hêt* は直訳すると「心を結合させること」と言った意味だが、「心を満足させること」や「説得すること」などを意味する (Crum 1999:437)。
- d. 『エレミヤ書』第 37 章第 8-9 節からの引用である。
- Feder (2002:160-161) からは、この部分のコイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書の古代末期のコプト語サイド方言訳が未発見であることが読み取れる。
 - コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書 “37:8 ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ εἶπεν κύριος συντρίψω τὸν ζυγὸν ἀπὸ τοῦ τραχήλου αὐτῶν καὶ τοὺς δεσμοὺς αὐτῶν διαρρήξω καὶ οὐκ ἐργῶνται αὐτοὶ ἔτι ἀλλοτρίοις 37:9 καὶ ἐργῶνται τῷ κυρίῳ θεῷ αὐτῶν καὶ τὸν Δαυὶδ βασιλέα αὐτῶν ἀναστήσω αὐτοῖς”(『エレミヤ書』第 37 章第 8-9 節 Rahlfs and Hanhart (2014))
 - コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書の現代の英訳 “37:8 On that day, said the Lord, I will shatter a yoke from off their neck, and I will burst their bonds, and they shall no more work for foreigners. 37:9 And they shall work for the Lord, their God, and I will raise up Daudid as their king for them.” (『エレミヤ書』第 37 章第 8-9 節 NETS)

第 6 章第 1 節

- (15) a. |¹ και γαρ εωρα|ρεῖληστῆς | σωτῆρ ἀν' εογ|νή, ἡ ογμᾶ ε|μῆνχρημα ἢ|ρητῶ·
kai gar e-šare-n-lêstês côth an e-ou-êi ê
 逆接続^キ 小辞^キ 焦点化^名-習慣相^名-定^複-盗人^{絶男} 押し入る^絶 否定 向格^名-不定^単-家^{絶男} 選択^キ
 そして だが 盗人が ~ する習慣である 押し入る ない 一つの家へ または
ou-ma e-mn-k^hrêma nhêt-f
 不定^単-場所^{絶男} 状況節化-否定存在^名-財産^{絶中} 所格^代-三^{単男}
 一つの場所 財産を持っていない その中に
 もちろん, 財産がない家, または場所へは盗人は押し入らないものだが,
- b. ἀλλα | εωραγσωτῆρ || επμα ετογ|ναδῆνχρημα | ἴμαγ·
alla e-ša-u-côth e-p-ma
 逆接続^キ 焦点化^名-習慣相^代-三^複-貫通する^絶 向格^名-定^{単男}-場所^{絶男}
 だが 彼らは押し入る習慣であり その場所に
et-ou-na-cn-k^hrêma m-mau
 関係節化-三^複-未来-見つける^名-財産^{キ中} 属对格^名-その場所^絶
 財産を持つことになる そこに
 しかし, それに対し, 彼ら (盗人) は財産が見つかるべき場所に押し入るものだ。

c. οὐτε ἐφαγῶσι τῷ ἀν ἐμμα | ετοῦροεις | ἤρητῷ ἐτρεῦ|αῶλ·

oute e-ša-u-côth an e-p-ma
 でもない^干 焦点化^名-習慣相^代-三^複-貫通する^絶 否定 向格^名-定^{単男}-場所^{絶男}
 でもない 彼らは押し入る習慣である ない その場所へ
et-ou-roeis nhêt-f e-tre-u-šôl
 関係節化-三^複-警戒する^絶 所格^代-三^{単男} 向格^名-使役-三^複-奪い取る^絶
 彼らが警戒している (関係節) その (再呼) 中で 彼らが奪い取る

彼ら (盗人) は彼ら (盗人) が奪い取らないか彼ら (見張り) が気をつけている場所には押し入らないものでもある。

d. ἀλλὰ | πμα ετοῦ|σοῦν χε ἤ|εροεις ἀν | ἤρητῷ ἀγῶ | σεοῶ.

alla p-ma et-ou-sooun če-n-se-roeis an
 逆接接続^干 定^{単男}-場所^{絶男} 関係節化-三^複-知る^絶 引用節化-接続^名-三^複-警戒する^絶 否定
 しかし その場所 彼らは知る 彼らは警戒していないと ない
nhêt-f auô se-obš
 所格^代-三^{単男} 並列接続 三^複-寝る^絶
 彼らの中で そして 彼らは寝ている

しかし, 彼ら (見張り) が気をつけず, 寝ていると彼ら (盗人) が知っている場所,

e. ἤτολοῦ νετεῶαγ|ῶτῷ ἐροῦ | ἤσετῶρῖ | ἤπετοῦνα|ῶντῷ·

ntoou n-ete-ša-u-côth ero-ou n-se-tôrp
 三^複 定^複-関係節化-三^複-傷つける^絶 向格^代-三^複 接続-三^複-強奪する
 彼ら 彼が傷つけたもの それらを (再呼) 彼らは強奪している
m-p-et-ou-na-cnt-f
 属対格^名-定^{単男}-関係節化-三^複-未来-見つける^代-三^{単男}
 彼らが見つけるものを

そのようなところに, 彼ら (盗人) は押し入り, 彼ら (盗人) が見つけるものを強奪するものである。

第 6 章第 2 節

(16) a. ἤτεῖ|ῖε ον ἐφαρε|πδιαβολος | τῶρῖ ἀν ἤ|πετροεις | ἀγῶ ἐτῶρεῖ | ἐπερῖσε | ναῖ.

n-tei-he on e-šare-p-diabolos tôrp
 属対格^名-指示^{単女}-様態^{絶女} 小辞 焦点化^名-習慣相^名-定^{単男}-悪魔^干 強奪する^絶
 このように また 悪魔が ~ する習慣である 強奪する
an m-p-et-roeis auô et-hareh
 否定 属対格^名-定^{単男}-関係節化-警戒する^絶 並列接続 関係節化-守る^絶
 ~ ない 警戒するものを そして 守るもの (関係節)

e-pe-f-hise *na-f*
 向格名-所有^代三^男-三^男-厄介ごと^絶男 与格^代-三^男
 彼の厄介ごと 彼に対する

このように、また、悪魔は、彼の厄介ごとに対して警戒し、防御する者に対しては、強奪を働かないものである。

b. *αλλα πε|τqnaδn̄tq̄ | εqpoεις αν̄ | οyτε n̄q̄p̄zο|p.55|τε αν̄ zнтq̄ | m̄πnoyτε̄*

alla *p-et-f-na-cnt-f* *e-f-roeis* *an*
 逆接接続^キ 定^男-関係節化-三^男-未来-見つける^代-三^男 状況節化-三^男-警戒する^絶 否定
 しかし 彼(再呼)が自分自身を見つげるもの 警戒せず ~ない

oute *n-f-r-hote* *an hêt-f* *m-p-noute*
 そして~ない^キ 否定-三^男-do^名-fear^絶 否定 前に^代-三^男 属对格^名-定^男-神^絶男
 そして~ない 彼は恐れず ない 彼の前に 神を

しかし、警戒せず、神を恐れず、我にかえる者、

c. | οyτε n̄q̄eipe | αν̄ m̄πmeeye | xεεqnh̄y e|zpaì ενσιx m̄|πnoyτε n̄ax̄ | n̄zē

oute *n-f-eire* *an m-p-meeue* *če-e-f-nêu*
 そして~ない^キ 否定-三^男-する^絶 否定 属对格^名-定^男-思い^絶男 引用節化-焦点化^代-三^男-来る^状
 そして~ない 彼がする ない 思いを 彼が来ている

e-hrai *e-n-cič* *m-p-noute* *n-aš* *n-he*
 向格^名-上側/下側^絶男 向格^名-定^複-手^絶女 属对格^名-定^男-神^絶男 属对格^名-何 属对格^名-様態^絶
 上/下側に 両手に 神の 何で 様態の(何の様態で)

彼は、彼がどのように神の手にきたのか、覚えていない。

d. *αλλα εq|ωεει m̄n̄th̄y | nim̄*

alla *e-f-šeei* *mn-têu* *nim̄*
 逆接接続^キ 焦点化^代-三^男-去る^絶 共格^名-風^絶 あらゆる
 しかし 彼は去る 風とともに あらゆる

しかし、彼が去るのはあらゆる風とともにである。(『エフェソの信徒への手紙』 4:14 への引喩)

e. *n̄toq | petεωax̄|τωp̄i m̄peq|petnaoγq̄ | εtq̄eipe m̄|moq̄ ax̄n̄t̄cō̄*

ntof *p-ete-ša-f-tôrp*
 三^男 定^男-関係節化-習慣相^代-三^男-強奪する^絶
 彼 強奪する習慣であるもの

m-pe-f-pet-nanou-f *et-f-eire*
 属对格^名-所有^代三^男-三^男-動詞名詞化^名-良い(準動)^複-三^男 関係節化-三^男-する^絶
 良いもの 彼がしている(関係節)

mmo-f *ačn-tⁱ-so*
 属対格^{代-三}単男 ~なしに^名-与える^名-抑制^{絶男女}
 それ(再呼)を 抑制なしに

彼こそ, 彼がなす彼の良きものを容赦無く強奪するものである。

注釈

- b. *hêt*-はしばしば *r-hote* と組み合わさって, 「恐れる」という意味を表す。
- d. i *šeei* は *še* 「行く」と *ei* 「来る」の複合語。
- d. ii 『エフェソの信徒への手紙』第4章第14節への引喩である。
- コプト語サイド方言によるコイナー・ギリシア語新約聖書の古代末期の訳 “*čekaas ce nnenšôpe nšêre šêm erephoeim fi mmon. epšeei mntêu nim ntesbô. mntkubia nnrôme. hnoupanourgia nnahrnkots nteplanê.*” (『エフェソの信徒への手紙』第4章第14節 Ch.Beat. Coptic A (Thompson 1932) 翻字, 発音区別符号および分綴のスタイルの統一は筆者による。)
 - コイナー・ギリシア語新約聖書 “*ἵνα μηκέτι ὤμεν νήπιοι, κλυδωνιζόμενοι καὶ περ- κφερόμενοι παντὶ ἀνέμῳ τῆς διδασκαλίας ἐν τῇ κυβείᾳ τῶν ἀνθρώπων, ἐν πανουργίᾳ πρὸς τὴν μεθοδείαν τῆς πλάνης,*” (『エフェソの信徒への手紙』第4章第14節 ネストレ=アーラント第28版)
 - コイナー・ギリシア語新約聖書の日本語訳「こうして, わたしたちは, もはや未熟な者ではなくなり, 人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の, 風のように変わりやすい教えに, もてあそばれたり, 引き回されたりすることなく, ,」(『エフェソの信徒への手紙』第4章第14節 新共同訳)

第7章第1節

- (17) a. |¹ Ⲅⲧⲃⲉⲡⲁⲓ ⲃⲉ ⲛⲉ|Ⲥⲛⲏⲅ ⲟⲩⲟⲛ | ⲛⲓⲙ ⲉⲧⲟ ⲛⲟⲩⲗⲏⲧⲁ ⲛⲟⲩⲱⲧ | ⲙⲏⲛⲛⲟⲩⲧⲉ | ⲁⲗⲱ ⲙⲏⲛⲛⲉⲛ|ⲉⲓⲟⲩⲧⲉ, ⲁⲗⲱ | ⲛⲏⲙⲁⲛ ⲗⲱⲱⲧⲟⲛ, ⲉⲓⲧⲉ ⲗⲟⲩⲟⲩⲧⲁ ⲉⲓⲧⲉ Ⲥⲗⲓⲙⲉ. ⲉⲓⲧⲉ ⲛⲟⲤ | ⲉⲓⲧⲉ ⲕⲟⲩⲉⲓ | ⲗⲁⲧⲏⲏ, ⲁⲗⲱ || ⲗⲁⲧⲉⲧⲏⲅⲧⲏ̅ | ⲧⲱⲕ ⲛ̅ⲗⲏⲧ | ⲁⲗⲱ ⲣⲟⲉⲓⲕ | ⲙⲓⲡⲓⲧⲗⲓⲛⲏⲃ | ⲛ̅ⲛⲉⲛⲃⲁⲗ.
- | | | | | | |
|--------------------------------------|-----------|---------------------------------|-------------|------------|---------------------------|
| <i>etbe-pai</i> | <i>ce</i> | <i>ne-snêu</i> | <i>ouon</i> | <i>nim</i> | <i>et-o</i> |
| ~のゆえに ^名 -指示 ^{単男} | 小辞 | 定 ^複 -兄弟 ^複 | 不定代名詞 | あらゆる | 関係節化-する / ある ^状 |
| このため | 再び | 兄弟たちは | 何らかのもの | あらゆる | ある(関係節) |
-
- | | | | | |
|---|----------------------|--|------------|---|
| <i>n-ou-hêt</i> | <i>n-ouôt</i> | <i>mn-p-noute</i> | <i>auô</i> | <i>mn-ne-n-eiote</i> |
| 属対格 ^名 -不定 ^単 -心臓 ^{絶男} | 属対格 ^名 -唯一 | 共格 ^代 -定 ^{単男} -神 ^絶 | そして | 共格 ^名 -所有-一 ^複 -父 ^{男複} |
| 心臓に | 唯一の | 神と | そして | 我らの父祖たちと |

auô nmma-n hôô-n on eite hoout eite shime eite
 並列接続 共格^代-^一複 自身^代-^一複 小辞 であれ^キ 男^男 であれ^キ 女^女 ~であれ^キ
 そして 我らと 我ら自身 また であれ 男 であれ 女 ~であれ

noc eite kouei hatê-n auô ha-te-têutn tôk
 大きい ~であれ^キ 小さい 下格:心 (*hte-*)^名-^一複 並列接続 下格:心 (*hte-*)^名-^二複 強める^絶
 大きい ~であれ 小さい 我らと そして 君らと 強めよ

n-hêt auô roeis mpr-tⁱ-hinêb n-ne-n-bal
 属対格^名-^心^{絶男} 並列接続 警戒する 禁止^名-与える^名-眠り^{絶男} 属対格^名-所有^複-^一複^目^絶
 心を そして 警戒せよ 眠らせるな 我らの目を

だから、兄弟たちよ、神と、そして我らの父祖たちとともに、そして、我ら自身とともに心を一にする全ての者たち、男であれ女であれ、大人であれ、子どもであれ、我らとであれ君らとともにであれ、心を強くし、警戒し、我らの目を眠らせるな。

b. οὐτε ρεκρικε | ἴνενβοῦζε

oute rekrike n-ne-n-bouhe
 そして~ない^キ うつらうつらさせる^絶 属対格^名-所有^代^複-^一複^眼^{絶男}
 そして~ない うつらうつらさせる 我らの眼を

そして、我らの眼をうつらうつらさせるなかれ。(『箴言』 6:4)

c. | ραντεπχοεις ναζην|επειρασμος | νιμ ἴτεπχα|χε

šante-p-čoeis nahm-n e-peirasmos nim nte-p-čače
 まで^名-定^{単男}-主^{絶男} 救う^代-^一複 向格^名-誘惑^キ^男 あらゆる 属格^名-定^{単男}-敵^{絶男}
 主が~まで 私たちを救う 誘惑から あらゆる 敵の

主が敵のあらゆる誘惑から我らを御救いになるまでは。

d. ναφενετ|φθονει γαρ | ερον

naše-n-et-p^ht^honei gar ero-n
 たくさん(準動)^名-定^複-関係節化-定^{単女}-嫉妬する^キ 小辞^キ 向格^代-^一複
 嫉妬するものはたくさんある というのは 我らに

というのも、我らに嫉妬するものは数多いから。

注釈

- a 複合前置詞 *ha-(h)te-*^名は、この箇所のように、*h* が落ちて、*hate-*となることがある。
- b. i *rekrike* 「(眠気により) こっくりこっくりする」もしくは「うつらうつらする」などオノマトペ起源と考えられる重複を持つ動詞がコプト語には多数存在する。*štort^絶*・*štrtr-*^名・*šttrô-*^代「掻き乱す」や *krmrm* 「ぶつぶつと不平を言う」はこれらのオノマトペ起源と見られる重複動詞の例である。Quevedo Álvarez (2010) はこれらの重複動詞の網羅的な

研究である。

b. ii これは、『箴言』第6章第4節からの引用である。

- コプト語サイド方言によるコイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書の古代末期の訳 “*mpr^thiêêb nnekbal · auô mpr^trekrike nnekbouhe ·*” (『箴言』第6章第4節 Worrell (1931:17))
- コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書 “*μη δῶς ὕπνον σοῖς ὄμμασιν μηδὲ ἐπινουστᾶξης σοῖς βλεφάροις*” (『箴言』第6章第4節 Rahlfs and Hanhart (2014))
- コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書の英訳 “Give your eyes no sleep, nor slumber with your eyelids” (『箴言』第6章第4節 NETS)

第7章第2節

(18) a. $\alpha\lambda\omega\ |\bar{\mu}\pi\bar{\rho}\nu\alpha\gamma\ \epsilon\rho\acute{\epsilon}\iota\sigma\eta\eta\gamma\ \epsilon\gamma\omega\tau\bar{\rho}\ |\tau\omega\bar{\rho}\ \bar{\nu}\zeta\alpha\zeta\ \bar{\nu}|\sigma\omicron\pi\ \bar{\epsilon}\bar{\mu}\pi\mu\ |\omega\epsilon\ \bar{\mu}\bar{\nu}\pi\bar{\tau}\ |\tau\omega\bar{\nu}\ \alpha\lambda\omega\ \epsilon\gamma\bar{\lambda}\alpha\rho\bar{\nu}\alpha\ \bar{\nu}\tau\epsilon\gamma\bar{\lambda}\chi\pi\omicron\mu\omicron\eta\ \bar{\nu} \cdot \bar{\nu}\sigma\epsilon\kappa\alpha\bar{\nu}\alpha\lambda\iota\zeta\epsilon\ \bar{\mu}\bar{\mu}\omega\bar{\tau}\bar{\nu}$

<i>auô</i>	<i>mpr-nau</i>	<i>e-hen-snêu</i>	<i>e-u-štrtôr</i>	<i>n-hah</i>
並列接続	禁止-見る	向格 ^名 -不定 ^複 -兄弟 ^男	状況節化-三 ^複 -困惑している ^状	属对格 ^名 -たくさん
そして	見るな	兄弟たちを	彼らが困惑している	たくさんで
<i>n-sop</i>	<i>hm-p-miše</i>	<i>mn-p-t̄-tôn</i>	<i>auô</i>	
属对格 ^名 -時・回 ^{絶男}	所格 ^名 -定 ^{単男} -喧嘩 ^{絶男}	共格 ^名 -定 ^{単男} -与える ^{名男} -口論 ^{絶男}	並列接続	
時の	喧嘩において	口論と	そして	
<i>e-u-arna</i>	<i>n-te-u-hupomonê</i>	<i>n-se-skandalize</i>	<i>mmô-tn</i>	
状況節化-三 ^複 -拒否する ^干	属对格 ^名 -所有 ^{代単女} -三 ^複 -節操 ^{干女}	接続法 ^代 -三 ^複 -害する ^干	属对格-二 ^複	
彼らは拒絶しており	彼らの節操を	彼らは害する	君らを	

そして，喧嘩と口論において何回も困惑し，節操を拒絶し君らを害する兄弟たちを見るな。

b. $\alpha\lambda\lambda\alpha\ \bar{\nu}|\bar{\nu}\epsilon\pi\bar{\nu}\omicron\gamma\tau\epsilon\ |\chi\omicron\omicron\phi\ \epsilon\tau\bar{\rho}\epsilon\gamma\ |\sigma\kappa\alpha\bar{\nu}\alpha\lambda\iota\zeta\epsilon\ |\rho.56|\ \bar{\nu}\bar{\mu}\bar{\mu}\alpha\bar{\iota}\bar{\nu}\omicron\gamma\tau\epsilon\ |\ \epsilon\bar{\nu}\epsilon\zeta.$

<i>alla</i>	<i>nne-p-noute</i>	<i>čoo-f</i>	<i>e-tre-u-skandalize</i>
逆接続 ^干	否定希求法 ^名 -定 ^{単男} -神 ^{絶男}	言う ^代 -三 ^{単男}	向格 ^名 -使役 ^代 -三 ^複 -悩ます ^干
しかし	神は～ないように	それを言う	彼らが悩ませるために
<i>n-m-mai-noute</i>	<i>eneh</i>		
属对格 ^名 -定 ^複 -愛する ^名 -神 ^絶	永遠 ^{絶男}		
神を愛するものたちを	永遠に		

しかし，神を愛するものたちを彼らが悩ませるために神がそれを決して言いませんように。

c. $\bar{\nu}\alpha\bar{\iota}\ \epsilon\tau\epsilon|\omicron\gamma\bar{\nu}\tau\alpha\gamma\ \bar{\mu}\bar{\mu}\alpha\gamma\ |\ \bar{\nu}\tau\epsilon\gamma\pi\iota\sigma\tau\iota\varsigma\ |\ \epsilon\sigma\chi\eta\kappa\ \epsilon\beta\omicron\lambda\ |\ \epsilon\zeta\omicron\gamma\bar{\nu}\ \epsilon\pi\epsilon|\chi\bar{\varsigma}\ \cdot\ \alpha\lambda\omega\ \epsilon\tau\alpha|\zeta\epsilon\ \epsilon\pi\epsilon\pi\bar{\nu}\alpha\ |\ \bar{\mu}\pi\bar{\nu}\omicron\gamma\tau\epsilon\ \cdot$

b. | ογοῖ νητῆ. | ετετναροῦ | ἔμπεροοῦ | ἡπετῆσῆ|πωῖνε ·

<i>ouoi</i>	<i>nê-tn</i>	<i>e-tetna-r-ou</i>	<i>hm-pe-hoou</i>
災い	向格 ^代 -二 ^複	焦点化-二 ^複 :未来-する ^名 -何	所格 ^名 -定 ^{単男} -日 ^{絶男}
災い	お前たちに	お前たちは何をするか	日において

m-pe-tn-cm-p-šine

属対格^名-所有^代単^男-二^複-見つける^名男-定^{単男}-問い^{絶男}

お前たちの訪問の

お前たちは災いだ，お前たちの訪問の日（最後の審判の日・天の怒りの日）にはお前たちは何をするのか。

c. τε|τῆλιψις γαρ || νηγ ἡπογε·

<i>te-tn-t^hlip^sis</i>	<i>gar</i>	<i>nêu</i>	<i>m-p-oue</i>
所有 ^代 単 ^女 -二 ^複 -苦惱 ^干 女	小辞 ^干	来ている ^状	属対格 ^名 -定 ^{単男} -距離 ^{絶男}
お前たちの苦惱	というのは	来ている	遠くから

というのは，君らの苦惱は遠くから来ているからである。（『イザヤ書』 10:3）

注釈

a. i *sunagôgê* は通常は集会堂の意味であるが，シェヌーテやベーサの文脈では修道士・修道女たちの共同体を示す。

a. ii 「小心，嫉妬，憎しみ，喧嘩，口論，狡猾さで」が最後の節のみにかかるのか，最後の節とその一つ前の節にかかるのか，それとも全ての節にかかるのかは不明である。

b.-c. 恐らくは，『イザヤ書』 10:3 への引喩である。

- この部分は Ciasca (1889) では欠如しているが，Bağ (2014) の校訂版には収録されている。コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書のコプト語サイド方言による古代末期の訳 “*eunar ou mpehoou mpcmpšine tetnt^hlip^sis gar nêu mpoue auô etetnapôt eratf nnim eboêtî erôtn · auô etetnaka petneoou tôn*” (『イザヤ書』 第 10 章第 3 節 Bağ (2014:73))
- コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書 “καὶ τί ποιήσουσιν ἐν τῇ ἡμέρᾳ τῆς ἐπισκοπῆς ἡ γὰρ θλιψις ὑμῖν πόρρωθεν ἔξει καὶ πρὸς τίνα καταφεύξεσθε τοῦ βοηθηθῆναι καὶ ποῦ καταλείψετε τὴν δόξαν ὑμῶν” (『イザヤ書』 第 10 章第 3 節 (Rahlfs and Hanhart 2014))
- コイナー・ギリシア語 70 人訳旧約聖書の英訳 “What will they do on the day of visitation? For the affliction will come to you from far away. And to whom will you flee for help, and where will you leave your glory” (『イザヤ書』 第 10 章第 3 節 NETS)

第 8 章第 2 節

- (20) a. ¶ Ἡ οὐκρίμα ναν | αν πε μνῆσα|τρенаποτας|се ἰπεντα|ἄποταςσε ἰ|μοφ. αγω
 ἵτῆ|σῆντοοτῆ | μῆπενταν|σῆντοοτῆ | ἵμμαφ
ê ou-krima na-n an pe mnnsa-tre-n-apotasse
 選択^キ 不定^単-問題^{キ中} 与格^代-^一複 否定 繫辞^{単男} ~のあとで^名-使役^名-^一複-非難する^キ
 または 問題 私たちにとって ~ない それは~だ 私たちが非難したあとで
m-p-ent-a-n-apotasse mmo-f auô
 属対格^名-定^{単男}-関係節化-過去^代-^一複-非難する^キ 属対格^代-^三単男 並列接続
 私たちが非難する者を 彼(再呼)を そして
ntn-smn-toot-n mn-p-ent-a-n-smn-toot-n
 接続^代-^一複-確立する^名-手^代-^一複 共格^名-定^{単男}-関係節化-過去^代-^一複-確立する^名-手^代-^一複
 我らが同意する 我らが同意する者と
nmma-f
 共格^代-^三単男
 彼(再呼)と

または, 我らが我らが非難するものを非難した後で, 我らが我らが同意するものと同
 意した後で, それは, 私たちにとっての問題となるだろうか?

- b. ἔνοφ|διαθηνκη εν|χομολογει | χεῖνενχι|ογε · ἵνεν|χισολ· ἵνεν|χεῖμπενσω|μα
 καταλααφ | ἵσμοτ· ἵνέ|ῖμῆντρε ἵνοφχ· | ἵνενῖλααφ | κροφ ἔνοφ|χοπ· ἵνῆκε|ωαχε
 ετῆνη | μῆῆσαναῖ
hn-ou-diat^h êkê e-n-homologeï çe-nne-n-çioue
 所格^名-不定^単-誓い^{キ女} 状況節化-^一複-約束する^キ 引用節化-否定希求法^代-^一複-盗み^{絶男}
 誓いにおいて 我らが約束し 我らは盗まないと
nne-n-çi-col nne-n-çehm-pe-n-sôma kata-laau
 否定希求法^代-^一複-取る^名-嘘^絶 否定希求法^代-^一複-汚す^名-所有^{単男}-^一複-体^{キ中} ~によれば^{キ中}-何らか
 我らは嘘をつかない 我らは我らの体を汚さない 何らかによれば
n-smot nne-n-r-mntre n-nouč nne-n-r-laau
 属対格^名-性格^絶 否定希求法-^一複-する^名-証言 属対格^名-虚偽^絶 否定希求法^代-^一複-する^名-何も
 性格の 我らは証言しない 虚偽の 我らは何もしない
n-krof hn-ou-hôp nne-n-r-mntre mn-n-ke-šače
 属対格^名-騙し^男 in^名-不定^単-秘密^{絶男} 否定希求法^代-^一複-する^名-証言^{絶男} 共格^名-定^複-他の-言葉^{絶男}
 騙しの 秘密において 我らは証言しない 他の言葉で
et-nêu mnnsa-naï
 関係節化-来ている^状 ~のあとで^名-指示^複
 来ている それらの後で

我らは盗みをしない, 嘘をつかない, どんな虚偽の方法においても我らの身体を汚さ

ない、密かに欺かない、これらの後で来た別の言葉（後から思いついた都合の良い虚偽の言葉）で証言しないと約束した誓いにおいて。

c. παλιν ἡτῆ|κτον᾽ ἡτῆα|αγ ἡκεσοπ᾽

palin n-tn-kto-n *n-tn-aa-u* *n-ke-sop*

再び^干 接続^名-一^複-向ける^代-一^複 接続^名-一^複-する^代-三^複 属対格^名-他の-時^{絶男}

再び 私たちは戻り 私たちはそれらをし 他の時に

再び、我らは他の時に戻り、それらをし、(以下、欠損)

注釈

- a. *ntn-smn-toot-n* (接続^代-一^複-確立する^名-手^代-一^複) は「同意する」という意味。
 a.-b. b は本来は、a の文にかかる前置詞句であるが、大変長大で日本語に訳せば大変難解になるため、b を独立させた。
 c. この後の「断片 1」の続きのページは欠損している。欠損部の後、p.61 から別のテキストである「断片 2」が見られる。

5 終わりに

本稿は、ナポリの国立ヴィットーリオ・エマヌエーレ 3 世図書館に所蔵されている白修道院 BA 写本の pp.49-54 にのみ現存しているペーサのテキスト（「断片 1」）の、文献研究に基づきつつ記述言語学の手法を用いたコプト語テキストのグロス付きの言語資料と文法注釈であった。日本においても宗教学的に注目されているナグ・ハマディ写本などのコプト語グノーシス主義文献は他言語からコプト語への翻訳であるのに対し、このペーサの著作は、5 世紀のコプト語の母語話者であるペーサが自分の母語であるコプト語で書いたテキストであり、母語話者が産出したテキストということで記述言語学的により価値が高いものである。本稿には、サイド方言の母語話者のペーサの著作の言語資料を提供する意義のほか、コプト語の文法用語に関しては日本語ではまだ整備されていないのが現状であるため、最新のコプト語文法用語を日本語訳し、それらを実際の言語記述において使用して学問的使用に耐えうるものにする意義もあった。

日本語のコプト語文法関係の出版物としては、岡島誠太郎の『こぶと語小文典』（岡島 1942）や、古代の歴史ロマンシリーズの第 9 巻目である『コプト語文法 ~ 古代エジプト語はいかにしてコプト語となったか~』（飯田 2006）がある。しかしながら、岡島（1942）は Steindorff（1930）を主要な参考文献として戦中に出版されたため内容がかなり古く、飯田（2006）は重大な誤り⁴⁹ が数多く見受けられる。このため、日本語では学術的にコプト語を知るのに厳しい環

⁴⁹ 飯田（2006）は、学術的な専門書としてではなく読み物としては面白いかもしれない。しかしながら、飯田（2006）には、基本的な誤りが非常に多く見受けられる。例えば、歴史的な解説において、飯田（2006）は、歴史も思想も異なる単性論派をアリウス派と同一視したり（飯田 2006:9）、チャコス写本中にある『ユダによる福音書』をナグ・ハマディ写本群に属しているとする（飯田 2006:1）

境であり、コプト語学習者は、初学者は Layton (2007), Eberle (2004), Brankaer (2010) や、古くは Lambdin (1983) や Plumley (1948) など、中・上級者は、Layton (2011) の参照文法⁵⁰ や Shisha-Halevy (1986) など、西洋語の書籍を用いて学習するしかほかならない状況である。このため、学術的に信頼できる日本語のコプト語の初学書および文法書が待たれる。そのためには、繰り返すが、日本語における適切な文法用語の整備が急務である。

本言語資料は、第一にはコプト語学・エジプト語学および一般言語学研究のために書かれた。しかしながら、ベーサ(アラビア語名ウィーサー)はコプト正教会の聖人であり、本言語資料はベーサの初の日本語訳を含んでいる。そのため、本稿は、言語学者だけでなくコプト正教会や古代末期のキリスト教の研究者の使用にも配慮し、言語学的なグロスの他にも音韻語ごとに日本語を振った。2016年に日本で初のコプト正教会の教会堂である聖母マリア聖マルコ・コプト正教会が京都府木津川市に設立され、2017年8月にはコプト教皇が来日し、メディアなどに上げられたこともあって、昨今、コプトが日本でも段々と注目されてきている。筆者は本稿のコプト語の言語記述が日本のコプト語研究あるいはエジプト語研究のみならず、日本の「コプト学」(Coptology)に貢献することを望む次第である。

略語一覧

男	男性	女	女性	中	中性
一	一人称	二	二人称	三	三人称
単	単数	複	複数	ギ	ギリシア語からの借用語
絶	絶対形	名	名詞接続形	代	代名詞接続形
複前	複合前置詞	準動	準動詞	指示	指示詞

凡例

- [] (言語資料中で) 欠損部分
- [] (言語資料以外で) 音声表記
- <> (言語資料中で) 編集者による補填
- <> (言語資料以外で) 文字素表記

引用箇所では、Pietersma and Wright (2007) を NETS, 共同訳聖書実行委員会 (2001) を「新共同訳」, Nestle et al. (2012) を「ネストレ=アールント第28版」として記した。章と節の番号から聖書のどこから引用したかは明白であるため、ページ番号は必要なもの以外は省略している。翻字およびグロスには、ハイフン(-)によって諸形態の境界を示した。また、グロスのコロンの(:)は形態素どうしが融合している場合に付した。

など基本的な事項の誤認が多数ある。飯田(2006)の文法解説に関しては、Loprieno(1995)から取られている部分が多いが、誤訳やスペルミスなど多数の誤りがある。

⁵⁰ コプト語の文法書は、Layton(2011)の参照文法以外にも西洋語において多数ある。

参考文献

- Amélineau, Émile (1907) *Œuvres de Schenoudi, Texte Copte et traduction française*, Vol. 1, Paris: Ernest Leroux.
- (1914) *Œuvres de Schenoudi, Texte Copte et traduction française*, Vol. 2, Paris: Ernest Leroux.
- Beccari, Claudio and Cristiano Pulone (2004) “Philological facilities for the Coptic script,” *TUG-boat*, Vol. 25, No. 2.
- Behlmer, Heike (2009) “‘Our Disobedience Will Punish Us...’: The Use of Authoritative Quotations in the Writings of Besa,” in Görg, Manfred and Stefan Wimmer eds. *Texte — Theben — Tonfragmente: Festschrift für Günter Burkard*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 37-54.
- Bąk, Tomasz (2014) “Il Proto-Isaia in Copto-Saidico: Edizione critica sulla base di sa 52 (M 568) e di altri testimoni.”
- Boud’hors, Anne (2013) *Le Canon 8 de Chénouté*, Le Caire: Institut Français d’Archéologie Orientale, 2 vols.
- Brankaer, Johanna (2010) *Coptic: a learning grammar (Sahidic)*, Vol. 1, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.
- Černý, Jaroslav (1976) *Coptic Etymological Dictionary*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ciasca, P. Augustini (1889) *Fragmenta Copto-Sahidica: Musei Borgiani*, Vol. 2, Roma: Typis Eiusdem S. Congregationis.
- Crum, Walter E. (1999) *Coptic dictionary*, Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, Richard M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) “Word: a typological framework,” in Dixon, Richard M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald eds. *Word: A cross-linguistic typology*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-41.
- Eberle, Andrea (2004) *Koptisch: ein Leitfaden durch das Saïdische*, München: Lincom Europa.
- Emmel, Stephen (2004) *Shenoute’s Literary Corpus*, Leuven: Peeters, 2 vols.
- Feder, Frank (2002) *Biblia Sahidica: Ieremias, Lamentationes (Threni), Epistula Ieremiae et Baruch*, Berlin and New York: Walter de Gruyter.
- Garitte, Gérard (1939) “A propos des lettres de S. Antoine l’ermite,” *Le Muséon*, Vol. 52, pp. 11-31.
- Grossman, Eitan (2014) “No case before the verb in Coptic,” in Haspelmath, Martin, Eitan Grossman, and Tonio Sebastian Richter eds. *Egyptian-Coptic Linguistic in Typological Perspective*: Mouton De Gruyter, pp. 203–225.
- (2018) “Did Greek Influence the Coptic Preference for Prefixing? A Quantitative-Typological Perspective,” *Journal of Language Contact*, Vol. 11, No. 1, p. 1–31.
- Grossman, Eitan and Martin Haspelmath (2014) “The Leipzig-Jerusalem transliteration of Coptic,” in Haspelmath, Martin, Eitan Grossman, and Tonio Sebastian Richter eds. *Egyptian-Coptic*

- Linguistic in Typological Perspective*: Mouton De Gruyter, p. 145.
- Haspelmath, Martin (2011) “The indeterminacy of word segmentation and the nature of morphology and syntax,” *Folia linguistica*, Vol. 45, No. 1, pp. 31–80.
- (2014) “The three adnominal possessive constructions in Egyptian-Coptic: Three degrees of grammaticalization,” in Haspelmath, Martin, Eitan Grossman, and Tonio Sebastian Richter eds. *Egyptian-Coptic Linguistic in Typological Perspective*: Mouton De Gruyter, pp. 103–144.
- (2016) “Coptic: a language without words,” The 5th Crossroad(s) Conference (Handout).
- Kuhn, K. H. (1956) *Letters and Sermons of Besa, translated by KH Kuhn*, Vol. 158 of Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium, vol. 157. Scriptorum Coptici, tomus 22, Louvain: Imprimerie Orientaliste L.Durbecq.
- Kuhn, Karl H. (1956) *Letters and Sermons of Besa*, Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium, vol. 157. Scriptorum Coptici, tomus 21, Louvain: Imprimerie Orientaliste L.Durbecq.
- Lambdin, Thomas O. (1983) *Introduction to Sahidic Coptic*, Mason: GA: Mercer University Press.
- Layton, Bentley (2000) *A Coptic grammar: With chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1st edition.
- (2004) *A Coptic grammar: With chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2nd edition.
- (2007) *Coptic in 20 Lessons: Introduction to Sahidic Coptic With Exercises & Vocabularies*, Leuven - Paris - Dudley: Peeters.
- (2011) *A Coptic grammar: With chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 3rd edition.
- Leipoldt, Johannes (1908) *Sinuthii archimandritae vita et opera omnia III*, CSCO 42, script. copt., series secunda – tom. IV, Paris: E Typographeo Reipublicae.
- (1913) *Sinuthii archimandritae vita et opera omnia IV*, CSCO 73, script. copt., series secunda – tom. V, textus, Paris: E Typographeo Reipublicae.
- Loprieno, Antonio (1995) *Ancient Egyptian: A linguistic introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Louis, Catherine (2008) “The Fate of the White Monastery Library,” in Gabra, Gawdat and Hany N. Takla eds. *Christianity and Monasticism in Upper Egypt: Volume I, Akhmim and Sohag*, Cairo: The American University in Cairo Press, pp. 83-90.
- Nestle, Eberhard, Erwin Nestle, Barbara Aland, Kurt Aland, Johannes Karavidopoulos, Carlo M. Martini, and Bruce M. Metzger (2012) *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 28th edition.
- Pérez, Gonzalo. A. (1984) *El Evangelio de San Mateo en copto sahidico. Texto de M. 569, estudio preliminar y aparato crítico*, Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Pietersma, Albert and Benjamin G. Wright eds. (2007) *A New English Translation of the Septuagint*, Oxford: Oxford University Press.

- Plumley, J. Martin (1948) *An Introductory Coptic Grammar; (Sahidic Dialect)*, London: Home and van Thal.
- Polotsky, Hans Jakob (1944) *Études de syntaxe copte*, Le Caire: la Société d'Archéologie Copte.
- Quevedo Álvarez, Alberto-Jesús (2010) *Los verbos reduplicados de doble consonante en la lengua copta. Un estudio morfológico, dialectal, lexicográfico y etimológico*, Barcelona: Institut d'Estudis del Pròxim Orient Antic, Universitat Autònoma de Barcelona.
- Rahlfs, Alfred and Robert Hanhart eds. (2014) *Septuaginta: Das Alte Testament Griechisch. Editio altera*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 4th edition.
- Reintges, Christoph Hanns (2004) *Coptic Egyptian (Sahidic dialect): a learner's grammar*, Vol. 15, Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Schroeder, Caroline T. and Amir Zeldes (2016) "Raiders of the Lost Corpus," *Digital Humanities Quarterly*, Vol. 10, Available at <http://www.digitalhumanities.org/dhq/vol/10/2/000247/000247.html>.
- Shisha-Halevy, Ariel (1986) *Coptic Grammatical Categories: Structural Studies in the Syntax of Shenoutean Sahidic*, Vol. 53, Rome: Pontifical Biblical Institute.
- Steindorff, Georg (1930) *Koptische Grammatik : mit Chrestomathie, Wörterverzeichnis und Literatur*, Berlin: Reuther & Reichard, Neudruck der 2en Aufl. mit Nachträgen.
- Thompson, Herbert (1932) *The Coptic Version of the Acts of the Apostles and the Pauline Epistles in the Sahidic Dialect*, Cambridge: University Press.
- Worrell, William H. (1931) *The Proverbs of Solomon in Sahidic Coptic: According to the Chicago Manuscript*, Chicago, Illinois: The University of Chicago Press.
- Zoëga, Georgius (1810) *Catalogus codicum Copticorum manu scriptorum qui in Museo Borgiano Velitris adservantur*, Romae: Typ. Sacrae Congregationis de propaganda fide.
- 岡島誠太郎 (1942) 『こぶと語小文典』, 飛鳥園, 奈良.
- 宮川創 (2014) 「コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおけるスーブラリニアーストロークと音素配列：自由形態素を中心に」, 『地球研言語記述論集』, 第 6 号.
- (2016) 「コプト・エジプト語サイド方言における拘束形態素上のスーブラリニアーストローク」, 『言語記述論集』, 第 8 号.
- (2017) 「コプト・エジプト語サイド方言における母音体系と母音字の重複の音価：白修道院長・アトリペのシェヌーテによる『第六カノン』の写本をもとに」, 『言語記述論集』, 第 9 号.
- 共同訳聖書実行委員会 (2001) 『聖書 新共同訳：旧約聖書続編つき』, 日本聖書協会, 東京.
- 戸田聡 (1995) 「無学な修道者アントニオス?：初期修道制研究の一動向」, 『オリエント』, 第 38 巻, 第 2 号, 162-174 頁.
- 小脇光男 (2013) 『聖書ヘブライ語文法』, 青山社, 改訂版.
- 塚本明廣 (1988) 「コプト語」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第 1 巻 世界言語編 (上)』, 三省堂, 東京.

- 辻明日香 (2016) 『コプト聖人伝にみる十四世紀エジプト社会』, 山川歴史モノグラフ 32, 山川出版社, 東京 .
- 飯田篤 (2006) 『コプト語文法 ~ 古代エジプト語はいかにしてコプト語となったか ~ 』, 古代の歴史ロマン 9, 国際語学社, 東京 .

受理日 2018 年 4 月 16 日